



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	十三浜小指 八重子の日記
Author(s)	佐々木, 八重子; 佐藤, 恵子; 宮内, 泰介 他
Description	2012年～2013年”はてなブログ”「八重子おばあちゃんの日記」に脚注を加えて冊子化したものです。 改訂版あり
Issue Date	2017-02-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/64478
Type	book
File Information	yaekononikki.pdf



十三浜小指 八重子の日記

佐々木八重子

十三浜小指 八重子の日記

佐々木八重子

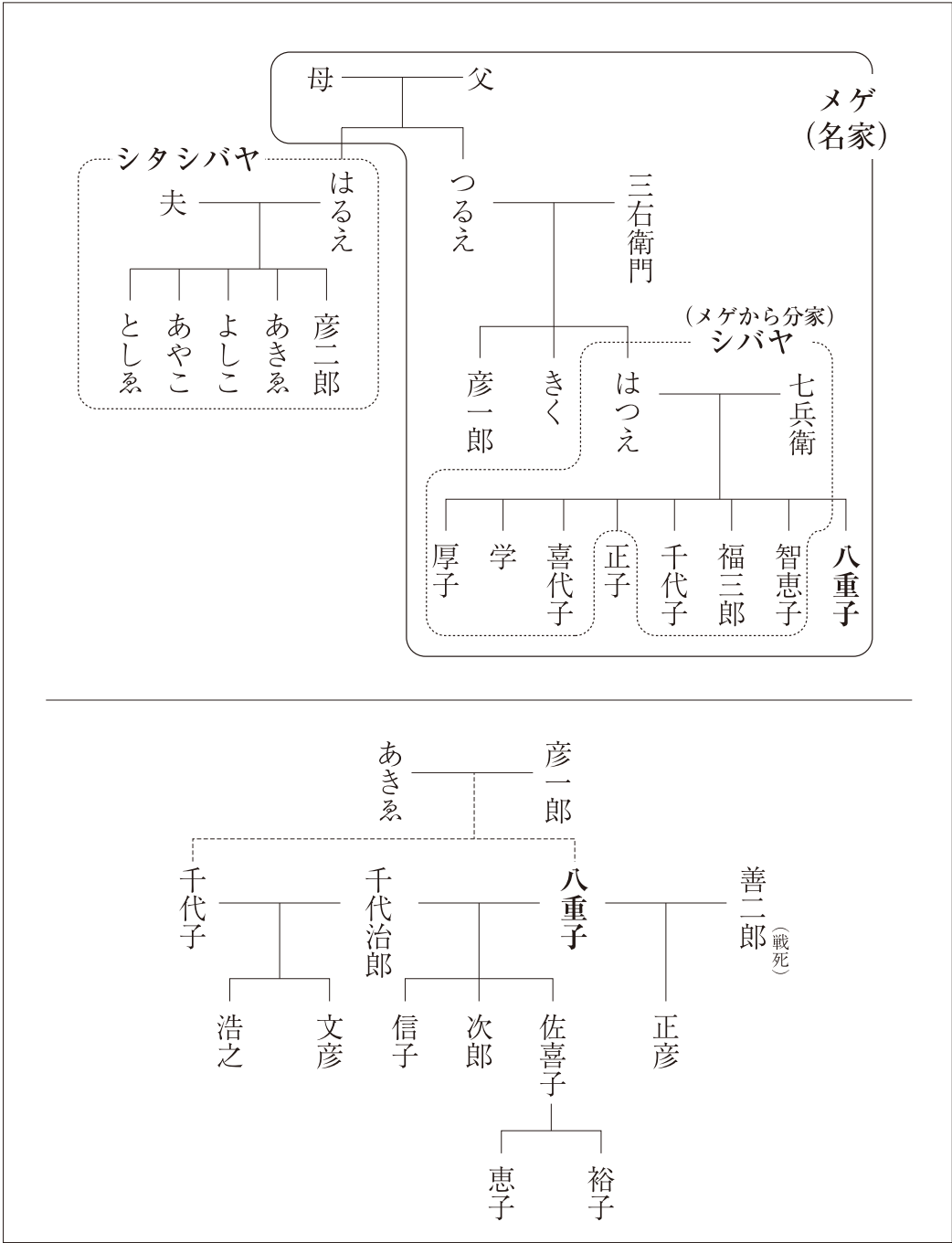
十三
浜小指

八
重子の日記

佐々木八重子

昭和二十七年	昭和二十六年	昭和二十五年	昭和二十四年
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
・	・	・	・
222	117	21	6

目次



「メゲ (名家)」「シバヤ」「シタシバヤ」は屋号。メゲの姓は佐々木。もともとメゲは大家族で生活しており、八重子はメゲで育った。八重子の家族 (実父七兵衛と実母はつえの家族) はその後メゲから分家して「シバヤ」となったが、メゲの跡取り彦一郎に子供がいなかったため八重子は妹正子とともに彦一郎の養子となり、メゲに残った。そして最初の夫善二郎 (戦死)、次の夫千代治郎 (小泊の屋号「イリ」より婿養子) を婿とした。したがって、以下の日記の注で「八重子宅」というのはすべて「メゲ」のことである。八重子が昭和27年1月5日 (新暦では1月31日) に逝去したあと、千代治郎は八重子の妹千代子を嫁に迎えた。なお、この日記の編者佐藤恵子は、八重子と千代治郎の孫に当たる。

昭和二十四年

○十二月一日水曜 うす曇

今日は朝から餅のお仕度で忙しかった。

一日中、かたつけ方をした。

せと物のせり売が来た。小皿を買った。正子と、おかあさんが石巻へ行った。

たらあみ船は波のためやすんだ。飯野川のおぢさんが「モト」をもってきた。三つ買った。

せと物一七五円 もと代二五〇円

計 四二五円

○十二月二日木曜 雨

縫物をして、お仕度をした。はつみさんが組合の紙をうりに来た。

紙代四四円

計 四四円

○十二月一日

「十二月一日」 旧暦の日付。本日記の日付は以下すべて旧暦。

「餅のお仕度」 餅は正月、運動会などの前に用意した。

「かたつけ方」 家の片付け、家事全般。

「せと物のせり売り」 瀬戸物を産地からトラックで持ち込み、灯りを点して夕方から夜にかけて売っていた。値段を上げるオークション形式のせりとは異なり、どんどん値切る「逆せり」だった。多くは道端で行われ、昭和三十年頃まで見られた光景。

「正子」 八重子の妹。メゲの養女。

「おかあさん」 八重子の養母、あきゑ。明治四十五年生まれ。

「たらあみ船」 四、五トンの動力船。昭和二十三年頃、八重子宅（本家「メゲ」、分家（彦三郎、盛正、八重子の弟の福三郎）の四軒で共同購入した。当時は動力船を持つのは珍しく、ほかには「向かい」（屋号、後出）のみが所有していた。主に刺し網漁でスケソ

○十二月三日金曜 晴

せんたくをしてから縫物をした。天気がよくてあたたかなであつた。

志津川へ油の配給に行った。「こうじ」と「うどん」を取りかへて来た。

作兵エ伯父さんとはる子叔母さんが石巻へ千代子見舞いにいつて来た。

夜は作兵エ伯父さんに様子をきいた。

父母教師会費 四十円

こうじ代・うどん 二一〇円

計 二五〇円

○十二月四日土曜 晴

家の仕事をして居た。今日は智恵子が石巻へ行ってきた。

正子が帰ってきた。バスのこしように夜十時過ぎに着いた。

千代子はとても順調で安心した。

おさめ代 四百円

計 四百円

○十二月五日日曜 晴

四五日ぶりであら網が行ってきた。魚はみんなくさくなつて分けて食べた。

お仕度ばかりした。朝に産後はじめて畠を見て来た。

麥の手入を一生けんめいやらなければならないと思つた。

○十二月六日月曜 晴

今日は家の船だけ行ってきた。魚は三十メばかり取って来た。

いさば屋へ売った。小麥を一斗五升うつてやつた。

一升八十円でした。

ウダラをとり、気仙沼の奥まで出漁することもある。季節によってマダイ、ヒラメ、チョウウガレイ、タナゴ、メバル、スズキなどもとれた。

「モト」 酒母。蒸した米・麴・水に酵母を加えて培養したもの。

○十二月二日

「はつみさん」 世話人の名前か。

「組合」 製紙組合。岩手県貌鼻周辺（現・一関市）の和紙を作る組合で、集落内に宿を取り和紙を売り歩いていた。正月には障子紙を貼り替えるが、当時は高価なものだった。

○十二月三日

「あたたかなで」 「あたたかな日」の誤記か。

「油」 食用油。当時は菜種油か。

「作兵エ伯父さん」 八重子の実父七兵衛の弟。

「はる子叔母さん」 八重子の実父七兵衛の妹。

「千代子」 八重子の妹。

「父母教師会」 現在のPTA。

○十二月四日

「智恵子」 八重子の妹。

「バス」 志津川から小滝浜、小滝浜から飯野川の二路線を、一日二往復程度の木炭バスが走っていた。

「おさめ代」 税金。

○十二月五日

「くさくなつて分けて食べた」 鮮度の落ちた魚は売らずに家庭内で消費した、ということ。

「産後」 次男、次郎を産んだ後。

「麥」 大麦。当時植えられていた麦は大麦が主であり、ご飯に混ぜるなどして食した（「麥」は麦の旧字体）。

○十二月六日

「家の船」 前出のたらあみ船のこと。

「メ」 貫目。一貫目は約三・七五キログラム。

「一斗五升」 一斗は十升。一升は約一・八リットル。

○十二月七日火曜 晴

小泊の叔母さんの「ドンブク」を幾日ぶりかでぬい終わった。ちよどおばさんが来たのもつて行きました。

相川の仲人さんをたのまれたそうです、午後から晩のお仕度をしました。

帯 百三十円

計 百三十円

○十二月八日水曜 晴

朝は正子と二人でかやをせをつて来ました。

少し風が吹いたが船は行つて来ました。たらは私達が相川へ行つて売つてきました。

夕方おそくまであそんできた。

千代子は十一日目で退院してきました。

夜はしばやへいつてみんなで九時すぎにきた。

○十二月七日

「ドンブク」 綿入れ半纏。

「ちよど」 ちようど。

○十二月八日

「かやをせをつて」 ススキ茅^{がや}を背負つて、の意。当時は集落共同の茅場^{かや}があり、一年に一軒ずつ順番で茅葺き屋根の葺き替えを行った。

「しばや」 メゲから分家した八重子の両親の家の屋号。日記中では「すばや」「すば屋」とも。

○十二月九日木曜 晴

今日も船は行つてきた。

とてもしづかな日よりで安心でした。

魚は少しなので相川へいつて、炭を一俵と金七百円代うつて来た。

私達はお嫁さんを見ました。小泊のおばさん達の仲人でした。はたを織り始めた。婦人会の「海苔」取りをしました。今年は大分とれた様でした。

○十二月十日金曜 晴

とても良い天気で婦人会の「のり」ぶつをしました。全部ぶつ終わつた。

魚は少しでした。四メ目ばかりなので白浜へやることにした。

正子等は青年団の畠おこしにいった。午後からはおしたくをしました。

○十二月九日

「魚は少しなので相川へいつて」

鱈などの魚が少ししかとれず、炭や現金と交換するために相川に持つていった、ということ。相川は漁業よりも炭焼きが盛んな集落だった。

「一俵」 炭の場合、一五キログラム程度か。

「はたを織り始めた」 機織りを開始した。

「婦人会の「海苔」取り」 相川学区の婦人会で行った海苔とり。

○十二月十日

「のり」ぶつ」とった海苔をきれいに洗つて包丁で細かく叩くこと。海苔を天日干しする前の作業。

「青年団の畠おこし」 当時は集落ごとに青年団があり、契約講（後出）の畑の一部が青年団用に充てられていた。青年団はその畑で小豆、ササ豆、いも類、大根などを作り、対岸の集落などに売りに行き資金を稼いだ。また、彼らは「夜磯」（夜間に磯物を収穫す

○十二月十一日土曜 晴

今日も天気が良くてたら取りはいつて来ました。
魚は一本つつわけました。麥ふみをしました。

○十二月十二日日曜 晴

そばひきをしました。のりは今日全部ほしだされた。
私達の組は百十枚とりました。米をついて来ました。五俵つきました。
そばきをこしらへました。雨おちへ海辺からじやりを運びました。
米つき代二百四十円

○十二月十三日月曜

たらあみは行つてきました。たらは五本つつ分けました。
夜は正月の始めなので魚を食べました。

婦人会の「のり」をみんな集まつてよりあわせました。
みんなで七百六十枚でした。十枚づつ分けた残りを三百四十枚うった。
百円の相場なそうです。夜は大雨が降った。

○十二月十四日火曜 晴

夜からの雨で川水がしばらくぶりでたくさん出ました。
電気がつきませんでした。

○十二月十五日水曜 晴

しば山分けをしました。
糸そめをしました。
お支度をして今日の日も過ごしました。
朝もやしひきをしました。

ること)でも資金稼ぎをした。

○十二月十一日

「麥ふみ」冬に霜柱で浮き上がる麦を足で踏む作業のこと。霜柱を防いで根張りを良くしたり、麦の伸びすぎを防ぐ。

○十二月十二日

「そばひき」蕎麦の収穫のこと。当時、蕎麦畑は皆が持っていた。
「のりは今日全部ほしだされた」海苔を天日干しした、の意。当時の海苔は一・「のりぶつ」を行う、二・水を入れた容器に海苔を入れる、三・竹と藁でできた簀の子の上に四角い木枠を乗せ、海苔をすくい枠内に均一に重ねる、四・木枠を外し簀の子ごと天日干しする、という手順でつくられた。海苔取りは男性も行うが、加工は女性の仕事だった。各家庭では五十センチ四方ほどの大きさの簀の子を何百枚と持ち、何年かに一度新しく作り替えた。
「私たちの組」婦人会の組のこと。

一組は五軒ほどからなり、集落ごとに二、三組ずつあった。

「米をついて来ました」精米をしてきた、の意。昭和十六年から三十八年頃まで近くの大室集落に工業用電氣を用いて精米する精米所が一軒あった。

「そばきり」蕎麦。

「雨おち」雨どい。

「米つき代」精米所の代金。

○十二月十三日

「よりあわせました」製品になった海苔を持ち寄った。

「百円の相場」一束あたり百円の値がついた、の意。一束は海苔十枚。海苔の収入は婦人会の運営費となった。

○十二月十四日

「川水がしばらくぶりでたくさん出ました」家の前を流れる川が久しぶりに増水した。

○十二月十五日

「しば山分け」集落の共有林から各

○十二月十六日木曜 曇

今朝も「もやし」をひいた。九時頃までかかった。

木綿うりが来て一反以上かつた。一反八百五十円でした。

しば刈りが行きました。

木綿 一千百円

バンド 百三十円

計 一千二百三十円

○十二月十七日金曜 曇

くもりがちの天気で午後から雪がふつて来た。

芝刈りが三時ころ帰った。

かなりの大雪でした。

はたをりがやつと終わつた。そばきをこしらへました。

○十二月十八日土曜 晴

朝からとても良い天気でした。雪がとけはじめた。四五寸降

った。

子供達の着物を裁った。

きなこ、まめごをついた。まめごは夜九時半すぎまでかかった。

米代 一千四百円

計 一四〇〇円

○十二月十九日日曜 晴

今日は日曜日なのですすはきをしました。正子と二人でふき

かたをした。

夕方はさつぱりとかたついて気持ちよくごはんを食べました。

風呂をたてました。

家へ薪を分配すること。小指の共有林は焼山（地名・後出）にあった。「糸そめ」機織り用の糸を染めること。

「もやし」 麦芽。

「もやしひき」 麦芽の収穫。

○十二月十六日

「木綿うり」 布屋。

「一反」 着物の場合の一反は幅約三十七センチ、長さ約十二・五メートルほどが標準。一反でおよそ大人用着物一着分がとれる。

「しば刈り」 小枝等の薪取り。家庭用燃料として使う。

「バンド」 ベルト。

○十二月十八日

「四五寸」 四、五寸。一二センチから一五センチほど。一寸は約三センチ。

「きなこ、まめご」 どちらも同じく一度焙烙で煎った大豆を臼で挽いた粉のこと。当時は通常「まめご」と呼び、「きなこ」は洒落た表現だったようである。

○十二月十九日

「すすはき」 年に一度、正月前に行く家族総出の大掃除。壁や天井の煤や埃、クモの巣などを竹の先に竹笹をつけた道具で掃除する。必要であれば拭き掃除も行った。

「風呂をたてました」 風呂を沸かした、の意。当時の風呂は薪で沸かす木桶風呂で、屋外に設置されていた。

○十二月二十日月曜 晴

せんたくをしてから相川へ砂とうの配給に行つて来ました。
くし・歯ぶらしなどを買つて来ました。

しば山は今日で刈り終わつた。

計 二百五十円

○十二月二十一日火曜 曇

今日はしばだしをしました。山から中だしをしてきめました。

午後はお支度をして、夕方「サラシ」の配給に行つて来ました。

岩出山から、ざると「ナットウ」を買つた。

二百五十円（ざる代）

百七十五円（サラシ代）

計 四百二十五円

○十二月二十二日水曜 晴

餅くさを煮ました。私と正子はしば出しをしました。

岩出山のお客さんをよんで酒をのませました。

○十二月二十三日木曜

今日、とても暖かな日でした。

たら網の勘定をしました。

今までの経費を差引いて、四つに分けて一人あたり一万五千
円づつあたりました。

みんな公平に気持ちよく帰りました。

○十二月二十四日金曜 雨

みんなでぬい物をしました。

雨は一日中ふりました。向かいでは、よろこびをしました。

○十二月二十日

「砂とうの配給」 当時は食用油や砂糖の他、サラシなどの日用品も配給されていた。

○十二月二十一日

「しばだし」 山から家まで木枝（柴）を運ぶこと。薪になる。

「中出し」 柴を山から家に運ぶ前、運びやすいところまで出しておくこと。

「きめました」 終わりました。

「岩出山」 旧岩出山町（現・宮城県大崎市）。当時から今にいたるまで竹細工がさかんな地域。

「ナットウ」 蕪納豆のこと。当時は贅沢品だった。

○十二月二十二日

「餅くさ」 ヨモギのこと。よもぎ餅はよく作られた。

「岩出山のお客さん」 福三郎（八重子の弟）の戦友。

○十二月二十三日

「四つに分けて」 たらあみ船を共同購入した本家、分家の計四軒で分けて、という意味。

「一人あたり一万五千円づつ」 当時としてはかなりの大金。

○十二月二十四日

「みんなで」 近所の女性たちで集まつて、という意味。

「向かい」 屋号。「向」の表記も。

「よろこび」 祝い事。

○十二月二十五日土曜 曇

正子は、すすはきをしました。

私はかみ洗いをしました。しばらくして洗ったのでとても気持ちよかった。

志津川町は、今年は波立ちでやめました。

組合からバケツなどいろいろのものを買った。

○十二月二十六日日曜 曇

今日は、粉こづきをしました。

午前中できました。こやしかけをしました。

床屋さんが来てみんなで刈ってもらった。

かみ刈代 百円

○十二月二十七日 月曜 晴

くさ餅つきをしました。今年はつねより早くきまった。午前

中に終わった。

相川へ「うどん」・餅米を受けて来ました。

夕方はもちつきの準備をしました。

障子はりをした。

米代 一千円

○十二月二十八日 火曜 晴

もちつきをしました。

今年は魚がさっぱりなくて、海へ行ったが取れませんでした。

とても寒くてもちがうんとすみしました。

○十二月二十九日 水曜 晴

鮎をこしらへました。

おかあさんにおしへられた通りに、

朝早くごはんを煮て、少しさましてからもやしをからんで十

○十二月二十五日

「かみ洗い」 当時の洗髪は月に一、二回、半日がかりの大仕事だった。ツノマタという海藻を煮て糊状にしたものを洗髪剤として使用した。

「志津川町は、今年は波立ちでやめました」 志津川には新年やお盆の品々を揃えた市が立ち、時期が来ると親戚と連れ立って出かける習慣があった。所有している動力船で出かけるため、海が荒れた時は行くことができなかった。

「組合」 現在の漁協のこと。当時は相川集落に事務所があった。漁協は出入りする業者から生活用品も仕入れており、住民に販売した。

○十二月二十六日

「粉こづき」 もち米を木の臼でつくこと。

「床屋さんが来て」 ふだんはシバヤのおじいさんがバリカンで散髪してくれたが、年に一、二回ほど隣の相川集落から床屋が来た。当時の相川集落に

は米屋、豆腐屋、桶屋、材木屋、製材所などもあり、ちょっとした街のようだった。

○十二月二十八日

「もちがうんとすみしました」 四角い切り餅をザルなどに並べ、屋外で干して凍らせたものを「凍み餅」と言った。寒さで餅がしっかりと凍った（「すみた」、ということ。

○十二月二十九日

「鮎」 麦芽鮎。炊いた米に「もやし」を絡めてつくる。「もやし」は麦芽のことで、麦芽が米のデンプン質を糖化させ、つやつやとした甘い鮎色の液が出る。糖化が終わったら漉して鮎液をとり、煮詰めて水鮎状にする。糖化には温度管理が重要で、鮎作りは一晚がかりの作業だった。

「おかあさん」 八重子の養母あきゑのことか。

時間位をくと、温度をいつも保つようにして、それからこす
のです。

家のはいままでにない位りっぱな飴でした。

○十二月三十日木曜 晴

とても静かなよい年取りでした。

正子は志津川へ、喜代子を迎へに行きました。

小たきまで船で来たので、割合早くきました。

きよ子はとても太ってかわいくなつて来ました。

魚やさつまあげをたくさんもつて来ました。

今年の年も大過なくすごした。

○十二月三十日

「年取り」 大晦日。

「喜代子」 正子の下の妹。

昭和二十五年

○正月一日金曜 くもり

少し雪が降って来ました。

いつも正月は雪景色で農家の休むのにきまって居るようです。
酒のみの人達がいつものようにまわってあるきました。

○正月二日土曜

せんたくをしてからぬいものをしました。

夜は、妹と二人で、しば屋へお茶のみに行つて来ました。

お父さんがはれものをだして見にいつて、いろいろお話がたりをしました。

○正月三日日曜 晴

ぬい物をしました。

佐喜子の着物をぬい始めました。

夕方、相川へ魚をうりに行つて来ました。

九百円代売つて来た。

○正月四日月曜

波立ちなので海の漁はやすんで居ました。

石巻の姉さん達が親子三人で泊まりに来ました。

今日は家へ来ていろいろお話をしました。とてもなつかしかった。

夜は風呂をたてて泊まりました。

小づかい 四百円

○正月五日火曜

縫物をしました。今日は静子が来ました。

夜は、智恵子や千代子が来てみなでお茶のみをしました。

康子へ三百円

かみ様おがみ 百円

○正月二日

「お父さん」 八重子の実父七兵衛。「はれものをだして見にいつて」 吹き出物ができたので見舞いに行つて、の意。

○正月三日

「佐喜子」 八重子の長女。昭和二十三年生まれ。佐藤恵子の母。

○正月四日

「波立ち」 波が高く荒れていること。
「石巻の姉さん」 とし子（としゑ）姉さん。シバヤより早くメゲから分家したシタシバヤの娘であり、八重子の祖母つるゑの妹の子。これからの女性
は勉強が必要、という考えで、「婦人の友」などの女性誌を八重子に毎月送り届けていた。日記中にもよく登場し、八重子は彼女をたいへん頼りにしていたようである。

○正月五日

「静子」 八重子の従姉妹。静子の母は八重子の実母はつえの妹キク。キクは小泊集落にある八重子の夫の千代治郎の実家（屋号はイリ）に嫁ぎ、静子を産んだ。八重子とは姉妹のように仲良く育った。日記中では「しず子」「しづこ」とも。

「康子」 古川（現・宮城県大崎市）から毎年八重子宅を訪れていた親子の子どもの名。親戚関係にはない。

「かみ様おがみ」 神主の家に行つて拝んでもらった、の意。男性は一月一

計 四百円

○正月六日

ぬい物をしました。とし子姉さんと、しづ子がお茶をのみました。

午後になってからしづ子が小泊へ行きました。康子等がかへりました。

昭子に百円

○正月七日木曜 晴

今日は学芸会なのでみんなで見物にいきました。たのしく過ごして来ました。

夕方おそく船はめろどを取って来ました。

小づかい 百円

計 三百円

日に氏神に拝んでもらう習慣があった。

○正月六日

「としこ姉さん」 前出「石巻の姉さん」。

「しづ子」 前出「静子」に同じ。

「昭子」 しづ子の娘。

○正月七日

「学芸会」 八重子の長男、正彦が通う相川小学校の学芸会。

「めろど」 メロウドのこと。イカナゴが成長したもので、春先にとれるため「ハルツゲウオ（春告魚）」とも。

○正月八日金曜 晴

佐喜子の着物をぬいおわった。夜遅くまでかかった。

夕飯にちらしづしを石巻の姉さんがこしらへておいしく食べた。

前の日の「メロド」を志津川へ売りに行って来た。とてもやすかった。

四千円代ばかりあった。

○正月九日土曜 晴

石巻の姉さん帰った。

磯の口開でした。

ふのり取り二人づつでした。だいぶとれたようでした。

夕方から役場の人達に酒をのませました。

○正月九日
「磯の口開」 磯物とりの解禁日のこと。

「ふのり取り二人づつでした」 フノリとりには各家から二人しか出られない、という決まりのこと。小指集落を含む十三浜では海苔、フノリ、ヒジキ、ツノマタなど磯物採集が盛んであり、いずれも集落ごとの決まりに従って行われる。

○正月十日日曜

今日は「まつも」と「海苔」をとりました。今まで寒かったが今日はとても暖でした。

○正月十一日月曜

のりぶつをしました。風が吹いてさむかった。
のり六十枚ばかりぶった。
喜代子が気仙沼へ行きました。お父さんが志津川までおくつていった。

○正月十二日火曜 晴

朝、山の神様へ参拝に行きました。
ぬいものをしました。

○正月十三日水曜

ぬい物をしました。
今日はいそもの売りがみんな行きました。

○正月十四日木曜

若もちをつきました。おばあさんと二人でつきました。
あめもちをして、おいしく食べました。

○正月十五日金曜

あや子等が三人で来た。夕飯は家で食べました。
夜はお湯を立てて、みんなでお茶のみをしました。

○正月十六日土曜 晴

今日は縫物をしないでやすんだ。

○正月十日

「まつも」 海藻の種類。日記中は「松茂」とも。

○正月十一日

「お父さん」 八重子の実父七兵衛。

○正月十二日

「山の神様」 集落裏の山道を登ったところにある小さなお堂に祀られていた。

○正月十三日

「いそもの売り」 海苔、フノリ、ヒジキなどの磯物を、河北町や石巻市内、塩釜あたりまでバスを使うなどして売りに行った。

「みんな」 このあたりの人みんな。

○正月十四日

「若もち」 正月を迎えて初めてつく餅、または小正月用の餅。
「おばあさん」 八重子の養母あきゑのことか。

「あめもち」 前出の「飴」をからめた餅のこと。飴だけを食べることもあったが、このように餅にからめて食べることもあった。ヨモギを使う草もちにくらべ、飴もちは特別なものだった。

○正月十五日

「あや子」 あきゑの末の妹。塩釜在住。
「お湯を立てて」 お風呂を沸かして。

せんたくやかたつけ方をした。

○正月十七日曜 晴

今日はお観音様のおまつりの日です。
朝に女の人達はみんな参拝しました。
夜は若い人たちに酒をのませました。
たいへんにさかったそうでした。

○正月十八日月曜 晴

お昼まへ、さき山へ麥ふみに行つて来ました。
毎日風ばかり吹いて麥は枯れそうでした。
餅のお支度をしました。
おかをどが今日帰つてきました。
売上金高
三千五百円也

○正月十九日火曜 雨

小雨が降りました。
盛正をたのんで海へあわびを取りに行つてもらいました。
思つたより取つてきました。

○正月二十日水曜 晴

今日は魚を見つけたので私の年かさねのお祝いをしました。
十五人ばかりよんどとても盛大なおふるまいでした。
気持ちよくやりました。
夜は千葉さんや、いりのお父さんなども来て大にぎわいでした。

○正月二十一日木曜 晴

今日はざんすで、おばあさん達をよんでごちそうしました。
いりのおばあさんもないし、横屋のおばあさんもこなかった。

○正月十七日

「お観音様のおまつりの日」 集落内にあった「十一面観音」の祭り。観音は安産の神とされた。

「さかった」 盛り上がった。

○正月十八日

「さき山」 地名。小指集落の南に位置する岬の一部を指す。八重子宅の畑があった。

「おかをど」 内陸方面に海産物を売りに行くこと、または売りに行く人のこと。八重子宅では「おかをど」をシバヤに頼んでいた。

○正月十九日

「盛正」 八重子の親戚。

「あわび取り」 通常アワビとりは開口（解禁日）が決まっているため、この日は翌日の祝いごとの準備のために特別に許可を取つたと思われる。

○正月二十日

「年かさねのお祝い」 厄年を迎えた男女が再び正月祝いをすること。正月祝いを重ねることの一つ多く年を取ったことにし、厄を免れようとした。

「いり」 八重子宅の前の家の屋号。八重子の夫、千代治郎の実家のイリとは別。

○正月二十一日

「ざんす」 意味不明。

「横屋」 八重子の実父七兵衛の実家の屋号。八重子宅の後ろにあった。

「横屋のおばあさん」 阿部かめよ。七兵衛の弟作兵エの息子與惣治の妻。

分家の人達ばかり来ました。

○正月二十二日金曜 晴

今日はやき山へ桑の木をはさみ方をしました。
まだ寒くて早いようですけど彼岸が近いからきつてもよい
そうです。
麥ふみもして来ました。
きのこに種をうへました。

○正月二十五日月曜 晴

はやすみねへ桑の木きりに行きました。
夕日の畠を小麥を蒔いたので全部きって来ました。

○正月二十六日火曜 晴

朝にお保呂羽神社へ参拝に行つて来ました。
しば山で歩くにひどかった。
でもとても高い山に上った気持はなんともいへない味が
しました。
九時頃かへつて来た。それからさき山へこやしかけをし
ました。

○正月二十七日水曜 晴

毎日ひどい風ばかり吹きました。馬を小泊へかしてやり
ました。
あななぐじへ麥ふみに行つて来ました。

○正月二十八日木曜 晴

さき山へ今日もこやしかけをしました。

○正月二十二日

「やき山」 地名。焼山。奥山にあり、
山を開墾した畑があった。焼山には小
指集落の共有林もあった。
「桑の木をはさみ方」 前年から残つ
た桑の木の枝を全て切り落とす作業の
こと。当時は養蚕が盛んであり、稚蚕
(生まれて間もない蚕) は柔らかな葉
を必要とした。この時期に剪定するこ
とで、春蚕(春に孵化する蚕)の時期
に新芽が芽吹き、柔らかな葉をあげる
ことができる。
「きのこに種をうへました」 キノコ
の種を栲木につけた、という意味。

○正月二十五日

「はやすみね」 地名。日記中には「は
やし峯」、「はやす峰」とも。
「夕日の畠」 ハヤスミネの西側斜面
の畑。夕日があたることからこう呼ん
だ。
「小麥を蒔いたので」「夕日の畠」に
蒔いた小麦によく日があたるように、
ハヤスミネの桑の木を切ったというこ
と。

○正月二十六日

「お保呂羽神社」 戸倉藤浜(現・南
三陸町戸倉)の保呂羽山山頂にある神
社。
「歩くにひどかった」 道が整備され
ておらず、歩くのが大変だった。
「こやしかけ」「こやし」は牛や馬の
糞、人糞などを用いた肥料のことであ
り、「こやしかけ」は肥料をまく、か
ける、という意。

○正月二十七日

「馬」 当時は多くの家が馬を飼育し
ており、八重子宅でも馬を飼っていた。
「あななぐじ」 地名。小指と大指の
間にある。小指集落の畑があった。日
記中には「あななぐち」「あななぐち」
「あなぐち」とも。

○正月二十八日

さき山かこへは三十だんばかりつけて今日で終わりました。
風が吹いてひどかった。

○正月二十九日金曜 晴

はやすみねへ小麦の草取りに行って来ました。
とても春めいだ暖かい日でした。

○正月三十日土曜 晴

いその口開でした。
のりをたくさん取りました。
なみだへ行ったので私と妹とはる子叔母さんと三人で
話かたりをしながら取って来ました。

○二月一日日曜 雨

雨ふりなので磯へも行かぬのでゆっくり餅を食べて休みまし
た。

小雨でしたが麦のためにどんなによかったかしれません。

○二月二日月曜 曇

日があたらないが「のり」ぶつをしました。
小泊のおばさんが来た
萬も卒業して来たので夕方きました。
もちをたべて行きました。

○二月三日火曜 晴

とても寒い風が吹きました。
ふのりの口あけでした。
彼岸の中日で休んだ。

「さき山かこへ」 さき山にある自分
の家の区画の畑、という意。

「だん」 馬の背に乗せて運ぶ荷の単
位。「こやしかけ」では二〇リットル
ほどの容量の桶を左右に下げた棒を馬
の背に乗せ、それを「一段」と数え
た。刈草など束ねるものは六束をもつ
て「一段」とした。馬を使ってそれら
を運ぶ作業を「段をつける」と言う。

○正月三十日

「なみだ」 地名。浪田。小指と大指
の間の海岸沿いの磯場を指す。小指の
人たちが磯物をとる場所であり、浪田
の上は現在小指集落の集団移転地とな
っている。

「はる子叔母さん」 八重子の実父七
兵衛の妹。

○二月二日

「小泊のおばさん」 八重子の叔母キ
ク。静子の母（前出）。

「萬」 静子（前出）の弟。

○二月四日水曜 晴

今日はひじき刈りをした。家では正子が出た。
夕方五時頃までかった。
私は桑きりをした。おかへいった。

○二月五日木曜 晴

麥のこやしかけをした。
大風でとてもひどかった。学校の人夫は相川からのんだ。
いそは今日はやめた。

○二月六日金曜 晴

のりと松茂の口開をした。
正子と二人だけで家ではそんなにとれなかった。
男の人達はひじきかりをした。

○二月七日土曜 晴

のりを取った。
少ししかとれなかった。
夕方はやし峯へ土入に行って来た。

○二月八日日曜 曇

今日は向で養蚕のおしょうじんを拝んだ。
私が行きました。
相川から山買いが来た。
お父さんが見に行って来てきめました。

○二月九日月曜 晴

おしす入です。
天気がよいので、のりやまつもをぶったので
とてもいそがしかった。

○二月四日

「ひじき刈り」 磯に出向き、ヒジキ
を鎌で刈り取る一連の作業のこと。ヒ
ジキは岩場に一〇～二〇センチの長さ
に伸びたものを刈り、茹でてから乾燥
させる。

「桑きり」 桑の木の剪定。
「おか」 内陸部の呼称。

○二月五日

「学校の人夫」 相川中学校建設のた
めの労働奉仕。

「相川からのんだ」 八重子の家か
らは人夫を出せなかったので、相川集
落にある分家のひとつに頼んで代わり
に出てもらった。

○二月六日

「男の人達はひじきかりをした」 岩
場などの危険な場所に船で出向くとき
は、男性が行うのが常だった。

○二月八日

「養蚕のおしょうじんを拝んだ」 そ
の年の養蚕の成功を祈った、の意。「お
しょうじん」は「お精進」か。

「相川から山買いが来た」 相川から
木を買いに来た、という意。植林した
杉が目当て。相川には山を買い人はい
なかったため、このとき来たのはあく
までも仲介人だったと思われる。

「お父さん」 八重子の養父、彦一郎
のことだろう。

○二月九日

「おしす入り」 お獅子入り、の意。
十三浜では毎年二月に行われる春祈禱
という行事で家々を獅子舞が巡回す
る。それぞれの家では獅子舞一行にご
馳走をふるまう。

「ぶった」 海苔やまつもを叩いて細
かくし、簀子の上に並べて干す作業。

いそまつりは正子が出た。

○二月十日火曜 晴

はやすみねに麥にこやしかけをしました。

今日でだいたいきめました。

暖かで春らしい陽気でしづかでとてもよかった。

梅の花がふくらんで来た。

○二月十一日水曜 晴

草とりをした。

午後からあななくちへ土入に行った。

○二月十二日木曜 曇

土入に行きました。

「いそまつり」 磯物の作業が一段落すると、女性たちは集まって花見がてらご馳走を楽しんだ。

○二月十二日

午後から、さすみちへ草取り・土入をきめて来た。
今日は山やきをしました。

喜代子がなつかしい手紙をよこした。

○二月十三日金曜 雨

しづかに小雨が降っています。

しとしとふる春さめもほんとに気持ち良いものですね。

今日はやすみです。

○二月十四日土曜 雨

夜からひき続き雨でした。ずい分降りました。

小泊の満雄をよんで御馳走をしました。

海は毎日の波立ちで魚はとれませんから

餅についてみんなでおいしくたべました。

「さすみち」 地名。「さしみず」とも。小指と大指の間にあり、小指の畑があった。

「山やき」 牧草地の野焼きのこと。当時は国有林を借りて家畜用の草地にしていた。山やきは集落総出で行うこともあり、境界線には必ず人が立ち、延焼しないように見張っていた。

○二月十四日
「小泊の満雄」 静子（前出）の弟。

○二月十五日日曜 晴

今日はおしゃか様の日で仕事はやすんで、だんごをこしらへてたべました。

夕方おがおどがきました。

売上金高

六千二百円 収入

○二月十六日月曜 晴

今日はしばやで味噌煮をしました。

たまなを植へました。

九十本ばかりうへた。

○二月十七日火曜 晴

はやすみねへいも畠を石かたつけにいつて来た。

午後からあななぐちへいつて、中耕をしてきた。

○二月十八日水曜 くもり小雨

石かたつけをした。

やき山へいつて、いも畠を始めたばかりの所へ雨が強くふつて来たのでもどつて来ました。

山崎薬屋さんが来てとまって行きました。

薬代 七百円

○二月十九日木曜 雨

小雨なので山はやすんだ。

ボロぬいをした。

配達の良夫さんにおばあさんがさけを御馳走した。

夜はずいぶん雨が降った。

○二月二十日金曜 くもり

さしみずへしばまるきに行つて来ました。

○二月十五日

「おしゃか様の日」 釈迦の誕生日。花祭り。

○二月十六日

「味噌煮」 味噌にする大豆を煮る作業。

「たまな」 キャベツ。

○二月十七日

「畠を石かたつけにいつて来た」 畑の石ころを片付けに行つて来た。

「中耕」 畝と畝の間の土を軽く耕すこと。

○二月十八日

「山崎薬屋さん」 富山県の薬屋で、「トンズンサン」と呼んでいた。年に一、二回ほど訪れて、宿を取りながら各集落の契約家庭に置き薬の補充をした。風船なども配ったので、子ども達には楽しみな訪問だった。八重子の家はよそから来る客人たちの泊まり宿となっていたようだ。

○二月十九日

「ボロぬい」 衣服の修繕。

「配達」 郵便配達員。

「さけ」 どぶろく。

○二月二十日

「しばまるき」 薪にする枯れ枝（しば）を家に持ち帰るため、縄などでしばって背負える程度の大きさにまとめる作業のこと。

お昼をたべてから、やき山へいも畠をうないに行った。

○二月二十一日土曜 はれ

よいお天気になったのでとても気持ちよかった。

ひる前はやき山へいも畠うないに行った。

午後から小泊へいった。

静子がお産をしたので。

それから明日の満雄のご祝儀の手伝いにいった。

○二月二十二日日曜 晴

天気が良くてご祝儀には全くふさわしい日でした。

私も手伝いに行つて夜おそくかへつてきました。

りっぱなおふるまいでした。

家ではみんないったのでいそはとめてもらいました。

「うない」 畠を作ること。

○二月二十二日

「いそはとめてもらいました」 開口日
が祝い事と重なってしまったので、集
落の関係者に話をして遅らせてもらっ
た、ということか。

○二月二十三日月曜 晴

今日は男のけいやくなので、いも蒔は私共だけではじめまし
た。

はやす峯へ車でこやし運びをした。

○二月二十四日火曜 晴

今日は女のけいやくです。みさこさんの家でした。

杉苗が来ましたので、人を頼んで植えました。

○二月二十五日水曜 はれ

いも蒔は今日から始まり

午後からためのおり上げをした。

夕方船おろしのお手伝いに男達が行きました。

○二月二十四日

「女のけいやく」 観音講。集落ごと
の既婚女性からなる組織。安産を祈る
のが目的だが、親睦の意もある。

「みさこさんの家でした」 この年の
観音講の当番の家のこと。当番となる
家は毎年持ち回りで決まっていた。

○二月二十五日

「ため」 汲取式のトイレに溜まった
汚物のこと。畑の肥料として使用する
ため、木製の専用樽に汲み取っていた。

「おり上げ」 汲み取った汚物を上澄
みとそれ以外とに分けて使用した。そ
の仕分け作業のこと。

「船おろし」 進水式。

○二月二十六日木曜 晴

こやしを正子と二人ではこんで、さき山をまいた。
夕方までかかった。
たたみをへがしました。

○二月二十七日金曜 曇

今日は、いもまきでよごれたものをせんたくした。
やき山の小さい畠をうなった。

○二月二十八日土曜 曇

朝、やき山へこやしを馬でつけてもらった。
一人で金肥でまいた。
正子は青年団のいもまきにいった。
夕方おかをどがかへって来た。
千二百円

○二月二十九日日曜 くもり

今日から麥の草取りをはじめました。
ことはさっぱり立たないので坂通を一日で終わった。
米の配給にいつてきた。
米十日代金
一千四百円

○三月一日月曜 くもり

さき山の草取りをした。

○三月二日 はれ

いその口開でした。
一と磯とらなかったで、のりは大分とれた。
のりぶつを夕方までした。

○二月二十六日

「たたみをへがしました」 養蚕は飼育や作業に多くの空間が必要となるため、その準備として畳を剥がしたのだろう。

○二月二十七日

「いもまき」 種いもを植えること。

○二月二十八日

「金肥」 購入した化学肥料のこと。
「青年団のいもまき」 青年団で持っている畑に種いもを植えた、ということ。畑の売上金は青年団の運営費になる。雄勝方面に売りに行くことが多い。

○二月二十九日

「麥の草取り」 麦畑の雑草取り。竹で作った串を使いながらハコベなどの雑草を取った。

「坂通」 地名。焼山付近か。

○三月二日

「一と磯」 大潮から大潮の間の二週間ぐらいの期間。

○三月三日火曜 くもり

節句潮だから大分ひいた。
波立ちであった。
いそ後はのりぶつをした。

○三月四日 くもり

今日は二人づつでて、つのまた取りをした。
常よりも少なかった。

○三月五日 雨

雨ふりでやすんだ。
ぬい物をしました。
夕方うどんをこしらへてたべました。

○三月六日 くもり

味噌あせをしました。
それからいそへ行つてのりを少しとって来た。

○三月七日日曜 はれ

ずいぶん波立ちでいそへいって、あそんで来た。
正子と二人でのり十四枚ぶった。

○三月八日月曜 くもり

お祭りでみんなやすみました。
消防の人達がポンプ操作をやった。
家で大さかもりをしました。

○三月三日

「節句潮」 春の彼岸の頃の大潮。
「波立ち」 波が高く海が荒れていること。

○三月四日

「つのまた」 磯の海藻の一つ。土壁塗料の材料となる。洗髪にも使われた。

○三月六日

「味噌あせ」 潰した煮大豆に塩麴を混ぜ合わせる作業（味噌合わせ）のこと。当時は味噌は各家庭で作っており、集会所には味噌を作る大きな釜もあった。

○三月八日

「お祭り」 小指集落内にある稲荷神社の祭り。毎年三月八日が春祭り、九月八日が秋祭りだった。

○三月九日火曜 雨
今日もやすんだ。

○三月十日水曜 くもり
正子は道路愛護で出た。
私は大指へいつて来た。
おかをどが帰ってきた。
売上金高
二千五百円也

○三月十一日木曜 曇
はやす峰へまごへあげをしにいった。
午後から入谷のおふるまいのお手伝いにいった。

○三月十二日金曜 晴
今日は家の人達の仲人で天気もよくとても良いご祝儀でした。
私はおてつだいにいった。

○三月十三日土曜 くもり
今日もおふるまいのお手伝いをした。
午後からさき山へごぼうを蒔きに行つて来た。

○三月十四日日曜 晴
婦人会の総会で学校へ行きました。
ちょうど桜の花も満開で花見をかねての総会でした。
会員ひとりづつ一品料理持参で、とても盛会でした。

○三月十日
「道路愛護」 道路の清掃作業のこと。
集落の共同作業のひとつ。

○三月十一日
「まごへあげ」 馬小屋から出た堆肥
を畑にまくこと。
「入谷」 地名。現・南三陸町^{いりや}入谷。

○三月十四日
「婦人会」 相川学区の婦人会。

○三月十五日 曜 晴

やき山へ麥のまきものきかけをしに行った。

○三月十六日 火曜 晴

いそは永井参拝の代参で、口開はしなかった。
今日もきかけをした。

○三月十七日 水曜 くもり

いその開口でした。

○三月二十七日 晴

売上金高
三千五百円也

○三月二十八日 晴

はやす峰へからいもの中耕へいきました。
おひるまへできめてきました。
午後からやき山へいった。
いもはたいしてのびて居なかった。

○三月二十九日 はれ

今日は田へほかの人をたのんで土運びに行きました。
夕方おそのかへって来ました。
米の配給代
二千円

○四月六日 晴

しらすを少し取った。
毎日朝夕とれるので、みんなよろこんで煮かたをします。

○三月十五日

「きかけ」畑を耕してから土寄せをする（作物の根元に土をかける）作業のこと。「きっかけ」とも言い、土の中に空気が入るように攪乱する。

○三月十六日

「永井参拝」旧桃生町永井にある神社「牛頭天王」に参拝すること。養蚕の安全を祈願し、戴いた守護符を蚕室に貼った。

○三月二十七日

「売上金高」磯物の売上金。

○三月二十八日

「からいも」じゃがいも。
「きめてきました」終わりました。

○三月二十九日

「ほかの人をたのんで」当時八重子の家は追波と対岸の大川に水田を持つており、大川に世話になる決まった家があった。水田は一度手放し、戦後に買い戻している。

「土運び」水田の土があまり良くなかったため客土していた。

「おその」おそく、の誤記か。

○四月六日

「しらす」コウナゴの稚魚。「アゾ」と呼ばれるすくい網でとった。
「煮かた」しらすを大きな釜で茹でること。茹でたあとは天日干しで乾燥させてから保存する。

夕方は石巻へ送ってやった。

○四月七日 晴

今日も同じく取れました。

海はとてもしづかなのでいそへ行って正子達はわかめを取ってきた。

○四月八日 晴

婦人会の役員会があつて学校へ行って来ました。

今年のこれからの行事について、こんだんして来た。

そんなによらないので、ゆっくりあそんで来た。

○四月九日 晴

小泊へお茶つみを手伝いにいきました。

私は家の仕事をした。

○四月十日 曇

しらすを煮たりほしかたをした。

小泊から正子はもどって来た

○四月十一日 曇

家のお茶を今日せいしに行った。

私は父母教師会の総会でいつて来た。少ししかよらなかった。

小雨がふって来たので、正彦が雨具をもって来た。

○四月十二日 大雨

縫い物をしてやすんだ。

昼頃から雨は大降りとなった。しばらくぶりの川水でした。

○四月七日

「しづかなので」 荒れていないので。

○四月八日

「よらない」 人が集まらない。

○四月九日

「小泊」 八重子の夫千代治郎の実家、イリ（屋号）のこと。

「お茶つみを手伝いにいきました」
当時はどの家も自分の畑に自家用のお茶の木を二、三本植えていたが、イリは本数が多かった。

○四月十一日

「家のお茶」 八重子宅でもハヤスミネにお茶の木を植えていた。

「せいし」 摘んだ茶葉を揉むこと。

○四月十三日 曇

午後からさつまいもを植えにいつて来た。
九百五十ばかりうえた。
新では五月二十八日です。

○四月十四日 晴

ひる前はせんたくをした。午後からさき山へ「うり」をまいて来た。

○四月十五日（水） 曇

磯へ行った。潮はとてもひいた。わかめ取りを一人づつで男の人達がとった。
夕方、前の山へいつて「ゴマ」をまいて来た。
おかからかへった。
しらす、いそもの合わせて

合計八千円也

○四月十六日木曜 曇

今日もいそへ出た。
正子は相川へ人夫に出た。田へ満男といった。
竹を積んでいった。
石巻から木綿うりが来た。六百円代買った。

○四月十七日金曜 小雨

いそへいつてふのりとりをしてきました。
大指のいそで、つや子さんといろいろ話し合ひをしてきました。

○四月十八日土曜 小雨

雨がふらないと思っていそへいつた。ふのりを少し取って雨

○四月十三日

「九百五十ばかり」単位は不明。
「新では」新暦では。

○四月十五日

「おかからかえった」「おかをど」「前出」から戻った。
「前の山」地名。前山。小指集落の南側に当たる岬の山を指す。八重子宅の畑があった。
「ゴマ」餅やご飯にまぶしたり、油に使用したりした。

○四月十六日

「竹」前山（前の山）の竹やぶから切り、アワビやウニを獲るときに使った。当時は丸竹（切り出したままの竹）を買いにくる人もいた。シバヤにも良い竹やぶがあった。

○四月十七日

「つや子さん」八重子の友人。

にぬれてはやくかへってきました。あとぬいものをしました。

○四月十九日日曜 雨

毎日の雨で全く困る。

今日は六月四日で、

参議院の選挙で学校へいつてきた。

全国区・地方区・各々一人づつ書くのでした。

雨はずいぶん降った。

○四月二十日月曜 小雨

ぬい物をしました。

大指の「トラック」の人達が泊まっていった。

○四月二十一日火曜 くもり

今日は少しはれたので少しばかりのシラス、わかめを

やっと干し上げた。

役場から須田さんがお出でになって赤十字の方をきめていった。

夕方いそへいつてのり四枚ばかりとった。

○四月二十二日水曜 曇

おひる前は車でしばだしをした。

桑畑に馬肥をつけてもらった。

はやすみねへいつて、あづきを蒔き始めた。

今夜は、家庭の和といふことについてつくづく考へた。

世間はどうでも一家仲良く暮らすのがなによりも大切である。

○四月十九日

「六月四日」 新暦の日付。

○四月二十日

「トラック」の人達 道路工事の人たち。

○四月二十一日

「須田さん」 不明。

「赤十字の方をきめていった」 赤十字の担当を決めた、の意。当時は各集落で担当が決まっていた。

○四月二十二日

「馬肥」 ウマゴヤシのこと。マメ科植物。肥料として使われた。

○四月二十三日木曜 くもり

やき山へ豆蒔きにいったきた。

麥はさつと色づいてきたばかりである。

少しはやいかもしれないがまきはじめた。

おかへいった。いもを二百うえてきた。

○四月二十四日金曜 曇

すば屋の田植えです。十一人ばかりいった。

家では二人いった。

私もおかあさんと二人でおしたくをした。

はやくごはんを食べてきた。

米代 一千四百円也

十日分 (三百三十五円)

○四月二十五日金曜 雨

毎日雨ばかりふってほんとに困ってます。

小泊へいってあそんできた。

ゴム足袋五足かへしてきた。

○四月二十六日土曜 雨

ぬい物をしていました。

モーターで田へ満男といったきた。

○四月二十七日日曜 雨

ぬい物をしてやすみました。

○四月二十八日月曜 雨

今日もやすみました。

○四月二十三日

「二百」 単位不明。

○四月二十四日

「十一人ばかりいた」 田植えに集まった人数を指す。田植えは「結い」で行った。

「おかあさん」 養母あきゑのことか。

○四月二十五日

「かへしてきた」 返却してきた、の意。足袋は前日の田植えで使ったか。

○四月二十六日

「モーター」 動力船。対岸の大川にある水田に行くために、船で川を渡る必要があった。

○四月二十八日

海へ行って「かぜ」をとってきた。
木綿（三百四十円）

○四月二十九日水曜 雨
ぬい物をしました。

○四月三十日木曜 曇
いそへ行ってふのりとりをした。
おひるをたべてから、まきものに行った所
雨がふってきてもどってきた。

○五月一日
やっとはれあがってとても良い天気でした。
いそへ行ってわかめとりをして、村の人達にとりかへされた。

男たちはかぜとりをした。
夕方、正彦と二人ではやすみねへまいてきた。

○五月二日土曜 晴後曇
若布の口開でした。だいぶとった。
ほし方は忙しかった。
おかの収入金
二千二百円

○五月三日日曜 雨
雨ふりでした。
夕方さき山へまめ蒔きにいったきた。

「かぜ」 ウニ。ウニには磯にいるバ
フンウニと沖にいるムラサキウニの二
種類がある。この場合はバフンウニの
ことか。

○四月三十日
「まきもの」 種まき。豆類の種まき
か。

○五月一日
「とりかへされた」 開口日以外の採
取は禁止されていたので、とった分を
没収されたということか。

「かぜとり」 ウニとり。
「正彦」 八重子の長男。昭和十六年
生まれ。

○五月二日
「若布」 ワカメ。
「おかの収入」 「おかをど」の売上げ
金。

○五月四日月曜 晴

家の田植えをした。

今まで水が多くてうえられなかった。

あちから四人、こちらから六人 計十二人でした。

海もしづかで、モーターでいって早く終わってきた。

わかめほしもして忙しかった。

○五月五日火曜 曇

朝から豆蒔きをした。ひる前であななぐちは終わった。

男達は海へ行って若布をとった。

○五月六日水曜 晴

若布ほしをした。石巻へ行って十二メづつもって売って来た。

一メ目二百円の相場です。

○五月四日
「あちら」 水田について世話になっ
ていた大川の家のこと。
「こちら」 八重子宅。

○五月六日
「石巻へ行って」 当時は北上川から
木造の客船で行った。

○五月七日木曜 うす曇

わかめほしをした。

夕方は雨ふりとなった。

○五月八日金曜 雨

折角の雨ふりではほんとに困ります。

ぬい物をした。千葉さんがきた。

○五月八日
「千葉さん」 不明。

○五月九日土曜 雨

今日も雨でやすんだ。

○五月十日日曜 小雨後晴

午後からやつとはれ上がり、やき山へ麥刈をしにいった。

夜、雨がふった。

○五月十一日月曜 晴

やき山を終へて夕方さき山へ行つて刈り上げた。
学校の人夫に出た。

豆種は、早生はあななぐちとさしみずだけ。あとはしばやの豆。
それからさき山の三角畠に「むかい」の豆を蒔いた。

○五月十二日火曜 晴

今日はやす峯へ朝から行つて夕方早く終わった。
常よりも刈り良いので予想以上はやかった。

今年の天気にはめづらしいく、とてもよい日があつた。

○五月十三日水曜 曇

あななぐちへ刈りに行つた。
青いところをおいてお昼前刈つた。
すぎてからばかりでくやしかつた。

それからやき山へいっていれかたをした。
三段と三まる出来た。
とてもみいりがよくてうれしかつた。

○五月十四日木曜 きりさめ、くもり

やき山へ、きむくりにいった。
後、さき山へ麦刈りにいった。千代子が手伝いにきた。

○五月十五日金曜 晴

ひさしぶりの日本晴れでした。
おひる前は、あななぐちの残りを麦刈りして、
後、午後から、かへし方をした。
今年の麦刈は今日で全部終わった。
かりやすいから、そんまなきまつた。

○五月十一日

「さしみず」 地名。小指と大指の間
にある。日記中、「さすみず」とも表記。

「三角畠」 端の方の畑。

「むかい」 屋号。「向」とも表記。

○五月十三日

「すぎてからばかりでくやしかつた」
豆の収穫期を逃して悔しい、の意。
豆は収穫が遅れると実が落ちてしま
う。

「いれかた」 肥料を入れること。

「三段と三まる」 段は馬に背負わせ
る荷の単位。一まる（丸）は五十斤＝
約三十キログラム。一段は六丸。した
がつて全部で二十一丸＝約六三〇キロ
グラム。

○五月十四日

「きむくり」 麦を刈つた後の切り株
を鋤で細かくし、土に鋤きこんで肥料
にすること。稲の場合には同様の作業
を「タブツ」と呼ぶ。

○五月十五日

「そんまなきまつた」 早く終わった。

○五月十六日土曜 晴

いれ方をした。はやす峯から四段と三まる、あななぐちから五段二まる、

前山から二段。さき山は一段二まる。今日はこれだけ入れた。

○五月十七日日曜 曇

学校の人夫で正子と二人でやき山をきむくりきめてきた。

あとはやす峯へいった。

飯野川の役場の人達が磯見物にきた。

○五月十八日月曜 曇

はやす峯をきむくり。

○五月十九日火曜 曇

あななぐちの麥あげをした。

夕方きむくりをした。餅をおいしくたべた。

○五月二十日水曜 曇

きむくり午前中をあななぐちして、さき山のむぎ入りをした。

五だん（あななぐち） 四段（はやす）

二段三まる（前山） 三段四まる（やき山） 四段（さき山）

○五月二十一日木曜 晴

しばやの麥打ちで三人いった。十七俵とった。

○五月二十二日金曜 晴

昨日におとらぬよい天気でした。

○五月十九日

「麥あげ」 麦刈り。

○五月二十日

「むぎ入り」 刈った麦を家まで運ぶ作業のこと。その後乾燥させ脱穀する。

○五月二十一日

「麥打ち」 脱穀。

「十七俵」 大麦の一俵は約五二・五キログラム。したがって十七俵は約九百キログラム。

分家の麦打ち（十五俵）とった。

○五月二十三日土曜 くもり

あななぐちのきむくり、福三郎が手伝いにきた。
夕方麦おとしをした。

三千五百円（米代）

○五月二十四日日曜 晴、にわか雨

今日は家の麦打ちです。

十人ばかりしてやりました。

なかなかきまらないので、いりに発動機が居たので少しの
んだ。

にわか雨でとてもひどかった。夕方までかかった。十七俵取
った。

○五月二十五日月曜 晴

若布の口開。

モーターで積み方をしてたくさん取った。

○五月二十六日火曜 曇

今日も若布とり。

くもったので海へ入れておいた。

○五月二十七日水曜 晴

一番除草をした。

七人って早く終わった。

○五月二十八日木曜 くもり

俄雨でやすんだ。

○五月二十三日

「麦おとし」 脱穀。

「福三郎」 八重子の弟。

○五月二十四日

「発動機」 発動機を用いた脱穀機。

「少しのんだ」 脱穀作業を少しお
願いした。

○五月二十六日

「海へ入れておいた」 とったワカメ
を陸に上げず海水に浸けておいた、と
うこと。天候が悪いときにはワカメを
乾燥させることができないので、傷ま
ないように海水に浸けておいた。

○五月二十七日

「一番除草」 その年一回目の水田の
除草。

後、さき山へきむくりに行った。

○五月二十九日金曜 曇

おこうそうをうへた。
とても大勢でこんだ。

○六月一日土曜 晴

小麥打ちをした。
一日中かかった。一石四斗ばかりとった。

○六月二日日曜 晴

桑畑ほりをした。はやす峯の切り桑畑をうなった。

○六月三日月曜 晴

桑畑ほり。

○六月四日火曜 晴

いそへいつて来た。

○六月五日水曜 晴

田の草取りをした。
七人いった。
小麥をあらった。

○六月六日木曜 晴

桑畑ほりをした。
さしみずを三人してうなった。

○五月二十九日

「おこうそうをうへた」 子どもが天然痘の予防接種を受けた。
「とても大勢でこんだ」 集団接種の会場となった小学校がとても混雑していた。

○六月一日

「小麥」 当時は大麦が主で小麦は少なかった。小麦は粉にして使った。

「一石四斗」 二五二リットル。一石
＝十斗で約百八十リットル。

○六月二日

「桑畑ほり」 桑畑を耕した。

○六月五日

「あらった」 水で洗った。

○六月七日金曜 晴

午前中は桑畑ほり、あとやき山をいも掘りした。

○六月八日土曜 晴

やき山のいもほり。

小豆をまいていたので、きつかけをした。

○六月九日日曜 晴

忘れることの出来ない、あのおそろしい

戦争の思い出の七年の供養をした。

分家の人達とあつかみの人だけでおがんだ。

○六月十日月曜 晴

はやす峯のいもほり十五ばかりとった。

やき山手まえから十五、

向こふから十四ばかりとった。

○六月十一日火曜 晴

いもほりの向こふの畠は大きくてほりやすかった。

お昼前でいもほりを終わった。

やき山のさつまいもの草取り。

男たちはハム釣りにいった。

○六月十二日水曜 晴

青年団のいもほりで正子はいったし、

今日始めて「おをなは」にいった。

さっぱりとれなかった。

○六月九日

「戦争のおもいで」の七年の供養をした」 八重子の前夫、善二郎は戦死している。この日は七回目の命日。

「あつかみ」 善二郎の実家の屋号。姓は佐藤。善二郎はメゲ（八重子宅）の婿養子。

○六月十日

「十五」 十五袋、の意。袋とはカマス袋のことで、藁むしろを二つ折りにして作る。

○六月十一日

「ハム」 ハモ。

○六月十二日

「おをなは」 はえ縄漁。

○六月十三日木曜 晴

かぜとりの開口である。

組合から砂安一俵きて分けた。

はやす峯の夕日にふつてきた。

かぜをむいて、あとおしたくを手伝いした。

お父さんは三回目の収入役の職についた。

村会議員全員の一致した推薦でした。

議員の人々が七八人きてお祝いをした。

○六月十三日

「砂安」 硝安（後出）の間違いと思われる。化学肥料。

「七八人」 七、八人。

「収入役の職」 村の三役のひとつ。村長、助役、収入役が村の三役。

○六月十四日金曜 曇

いそへいつてきた。正子は人夫にでた。

さしみずへ硝安をかけてきた。

○六月十四日

「硝安」 硝酸アンモニウム。窒素肥料のひとつ。

○六月十五日土曜 曇

いそへいった。てん草をとった。

○六月十五日

前山の白菜まく所をうなった。

朝に前山に硝安をやった。

「やった」 散布した。

○六月十六日日曜 雨

まちにまった雨降りでみんなよろこんだ。

やすんだ。

ズロースをぬい方をした。

○六月十六日

「ズロース」 股上の長いゆったりとした形の女性用下着。

○六月十七日月曜 曇

そばを蒔きはじめた。

からいもをかたつけた。

○六月十七日

「かたつけた」 片付けた。

○六月十八日火曜 曇

やき山へ大根蒔きをした。まえ山へ白菜もまいた。

○六月十八日

「まえ山」「前山」（前出）と同じ。

○六月十九日水曜 曇・雨

豆の二番を今日からした。

やき山へいった。

豆は赤くなって悪かった。

○六月二十日木曜 曇

はやす峯へいった。

俄雨で畠はぬかってひどい。

さき山をした。

夕方雨でぬれてきた。

○六月二十一日金曜 大雨（八月四日）

夜からふり通しでずいぶん降った。

なにしろ四十年ぶりの大雨だそうでした。

田の被害はたいしたものでした。

こちらは畠の作物はあまりなかった。

○六月二十二日土曜 晴

おひるまえはいもかたつけ。

あと豆の二ばんをした。

○六月二十六日水曜 晴

天気が毎日続いてよいのでほし草を刈って少しほした。

豆は今日までかかった。

○六月二十七日木曜 くもり（八月十日）

時々きり雨がふるので草はほせなかった。

○六月十九日

「豆の二番」 豆の二回目の収穫。

「豆」 小豆のことか。

○六月二十日

「ぬかって」 水が溜まって。

○六月二十二日

「八月四日」 新暦の日付。

「あと豆の二ばん」 遅く植えた豆の二回目の収穫。

○六月二十六日

「ほし草を刈って」 自分の山から飼
い馬の餌となる草を刈って。

○六月二十八日金曜 晴

小泊へいってお手伝いをして来た。

○六月二十九日土曜 晴

いそへ行った。

あとせんたくをした。

○六月三十日日曜 晴

朝は曇って居たがとてもよい天気でした。

ほし草を少し刈って、手すりにほした。

はやす峯からずんばいを正子と正彦が落として来た。

○七月一日月曜 晴

男達は村仕事に出た。

私はへらなを少し蒔いてあと、
ねぎをやとりかへした。今年はたくさん植えた。

○七月二日火曜 晴

ふとんのせんたくをした。
漁業の調整委員の選挙にいつて来た。
夕方にもかたつけをした。
今年は種のほかに十二俵ばかりです。
すりいもはとった。

○七月三日水曜 晴

朝はさしみずへほし草を刈りにいつて来た。
養蚕の準備をした。
すすはき・たけ洗い・箱あらいをした。

○六月二十八日

「お手伝い」 畑作業の手伝い。

○六月三十日

「ずんばい」 野生のスモモ。

○七月一日

「村仕事」 相川中学校を建てる共同
作業のこと。

「へらな」 葉野菜の一種。

「やとりかへした」 植え替えた。

○七月二日

「漁業の調整委員」 海区漁業調整委
員会の委員のこと。当時は県内に北部・
中部・南部の三つの海区があり、十三
浜は中部に属した。中部の調整委員の
多くは志津川から出ている。

「いもかたつけ」 収穫して乾燥させ
たいもを袋に入れて、屋根裏部屋に保
管すること。

「すりいもはとった」 収穫したいも
の中から「スライモ」用のものをより
分けておいた。

○七月三日

「すすはき」 蚕室（蚕を育てる部屋）
の掃除。

「たけ洗い」 「蚕座」を置く棚の竹を
洗うこと。「蚕座」とは幼虫期の蚕を
飼育する道具。蚕室に設置された棚に
並べて置く。竹編みのザル状や箱状の
ものがあるが、地域によって素材や形
はさまざま。もともとは藁で作ってい

○七月四日木曜 晴

今日は消毒をした。

私はほし草刈りにいったので、おばあさんがした。
六人してはやくきまった。

○七月五日金曜 晴

草いれをした。

全部で十だんばかりしかなかった。
とてもよい天気で、ほんとに今年はよかった。

○七月六日土曜 晴

今日は蚕の掃立をした。
家では大四枚はいた。
分け方はとてもこまった。
大・二七、小・四きた。

○七月七日日曜 晴

蚕のかたわら、せんたくをした。
桑はさき山を取ってかけた。

○七月八日月曜 晴

天気は毎日とても暑い日ばかりつづいて
しのぎがたい。
大根にこやしをかけた。やき山へいって桑を取った。

○七月九日火曜 晴

おひるすぎ、箱からあけた。
あみを洗った。

たことから「ワラダ」とも呼ばれる。
「箱洗い」「蚕座」の掃除・準備のこと。

○七月四日

「消毒」 蚕室は嚴重に殺菌消毒した。
目張りをし、専用の葉を霧吹きで吹き
つけ、半日から一日がかりで行う。そ
の間蚕室への出入りは禁止された。葉
は大室にある養蚕組合の役員の家に買
いに行っていた。

○七月五日

「草いれ」 乾燥させた草を家まで運
ぶこと。

○七月六日

「掃立」 孵化した蚕（毛蚕）を蚕座
に移す作業のこと。蚕の卵は「蚕卵紙」
と呼ばれる紙の上に産みつけられた状
態で届き、紙上で孵化する。細かく刻
んだ桑の葉を与え、蚕を呼び集めたあ
と、紙上に残った毛蚕を羽ばうきなど
を使ってそつと掃き移すことからこう
呼ばれる。

「大四枚はいた」 蚕卵紙四枚分を掃
き立てた、の意。蚕卵紙の大きさは時
代や地方によって異なるが、当時の北
上では「大」は一〇グラムを指すた
め、八重子が用いた蚕卵紙は一枚あた
り一〇グラム程度の卵が生みつけられ
ていたと思われる。

「きた」 養蚕の指導員が蚕卵紙を持
ってきた、の意。当時は養蚕組合を介
して入手していた。

○七月七日

「取ってかけた」 桑の葉をとってき
て蚕にかけた。

○七月八日

「しのぎがたい」 過ごしにくい。

○七月九日

「箱からあけた」 蚕座を掃除するた
めに一時的に蚕を移した。
「あみを洗った」 蚕座に網を乗せ、
その上から桑をやると蚕が桑を食べに
網の上にあがつてくる。網を持ち上げ
ると蚕座に残った桑の食べかすや蚕の

○七月十日水曜 晴

おぼんのまち用たしに志津川へモーターでいった。

○七月十一日木曜 晴

今日は金華山へモーターで参拝にいった。

なぎがよくてとてもよかった。

○七月十四日日曜 くもり

蚕は三眠桑つけた。

いくらおぼんでも、いそがしい。

○七月十七日水曜 晴

福三郎等が出稼ぎにいった。船で志津川まで送った。

青年団の舟きようそうで大へんにぎわいでした。

わたしたちはすりたてをして見にいかなかった。
とても残念でした。

○七月二十三日火曜 晴

今日桑つけた。

残りの桑とみしよを取った。

かつを釣りに出た。

○七月二十四日水曜 晴

今日もお昼から桑つけた。

桑取りは女の手ばかりである。

やき山をとった。寺の上もとった。

糞を掃除することができる。この作業を「しりとり」または「すりとり」といい、ここではその網を洗ったということ。

○七月十日

「まち用たし」 街へ用を足しに行くこと。

○七月十四日

「三眠」 蚕は繭を作るまでに四回脱皮をする。孵化したてを一齢、一回目の脱皮から二回目の脱皮までを二齢と呼び、その後三齢、四齢を経て五齢のあと蛹になり繭を作り始める。脱皮時期になると桑を食べるのを止めて動かなくなり、脱皮が終わるとふたたび動き始めることから、この時期を「眠」という。三眠とは三回目の脱皮期の眠のこと。

「桑つけた」 桑をあげた、の意。桑をあげるタイミングは蚕の様子をよく見て行う。また、蚕の齢によって好む葉の固さが異なるため、幾種類もの桑を使い分けた。

○七月十七日

「出稼ぎ」 当時は北海道までサンマ棒受け漁やサケ漁に出稼ぎに行くことが珍しくなく、こうした出稼ぎを「おきとせ沖渡世」と呼んだ。福三郎たちもそれか。

「青年団の舟きようそう」 集落対抗の舟競争。各集落からの選り抜きの青年たちによる競争で、木造船を使った一人漕ぎ、二人漕ぎ、三人漕ぎ競争のほか、水泳競争があった。太鼓による応援もあり、大変盛り上がった。

「すりたて」 蚕座の掃除のこと。「しりとり」(前出)に同じ。

○七月二十三日

「みしよ」 桑の種類。

「かつを釣り」 鰹釣り。動力船で男性たちが出かけた。

○七月二十四日

「寺の上」 地名。相川の地福寺の上。

○七月二十五日木曜 くもり

午後からはやす峯へとりにいった。
大へんのびて気持ちよくとった。
ほらかご四本とった。

○七月二十六日金曜 晴

私達ばかりなので、桑取りはとても忙しい。
でも天気がよくてなによりです。
桑は大へん伸びてとりやすい。
はやす峯からは十八本ばかりとった。

○八月一日 くもり

今日は蚕は八回目なのでうんとひきた。
高橋さんがきて、廻転まぶしの使用をして見せた。

○八月二日 晴

百三十枚ばかり残って夕方までとても忙しかった。

○八月三日 はれ

今日も五十五枚ばかりあったのを、夕方までに
二枚になった。
今年の蚕はとてもよかったが、ひきてから、
ごろがたくさん居た。

○八月四日金曜 日本晴

よいお天気なのであみ洗いやこも洗いをした。
こもぬきをした。
かつを船はいわしをとってきた。

○七月二五日

「ほらかご」 桑摘みに使う竹の編籠。
小学校高学年の子どもが二、三人入る
大ききで、運ぶのはとても大変だっ
た。

「四本」 ほらかごは一つを一本と数
えた。

○八月一日

「八回目」 五齢になって八日目を迎
えた蚕。

「ひきた」 蚕が繭を作る状態になる
こと。桑を食べなくなり、体が黄色く
透き通り（熟蚕）、頭を振り繭を作る
場所を探し始める。五齢を迎えると六
日から八日の間に一斉にその状態に入
る。八日目を迎えたのでたくさん（う
んと）ひきた、ということ。

「高橋さん」 養蚕の指導員。

「廻転まぶし」 「まぶし」とは蚕が繭

を作るための場所のことで、いろい
ろな形の道具が使われる。「廻転まぶし」
は上に向かっていく蚕の習性を利用し
た回転式の繭棚であり、格子状の木枠
で作られる。それまでは藁を編んだ「藁
まぶし」が主流であり、八重子宅では
この年から廻転まぶしを使い始めた。

○八月二日

「百三十枚」 廻転まぶしの棚の枚数
か。

○八月三日

「ごろ」 繭を作らなかった蚕。

○八月四日

「こも」 藁で編まれた敷物。まぶし
の下に敷き、繭になる前の蚕の糞尿を
受け止めた。毎年洗い、翌年以降も使
用した。

「こもぬき」 こもとまぶしが貼りつ
いてしまうので、引きはがして繭を取
りやすくする作業。

「いわし」 鯉漁の餌として用いる。

○八月五日土曜 くもり

こもぬきをした。

今年は去年よりもごろがあるようです。

○八月六日日曜 日本晴

とてもよいお天気なので朝からこもあらいをした。

あともぬき。

夕方かつを釣りが来て相川へうりにいって来た。

○八月七日月曜 曇

しばらくぶりで畠へいって見た。

さつまいものつるかへしをした。

つばき取りもした。

ごまも刈りとって来た。

○八月八日火曜 大雨

まゆかきを始めた。

雨ふりで川水がうんとでた。

小指の出荷は九月二十二日で最終です。

まゆはこがらがずいぶん固くしめた。

○八月九日水曜 雨

分家の人達も来て今日もまゆかきをした。

雨は一日中ふり続いた。

○八月十日木曜 雨

午前中でまゆぬきはをへた。

台所の棚は夕方までかたついで気持ちよくごはんを食べた。

まゆは果たしていくら出るのか心配だ。

○八月七日

「さつまいものつるかへし」 根元に
つたいものを大きくするため、蔓を裏
返して途中に出来る小さな根を取る作
業。

「つばき取り」 椿油をつくるために
椿の実を取ること。椿は畑に自生し、
精油する際は機械を持っている人から
借りて行った。八重子宅ではハヤシミ
ネに多く生えており、髪につけたり天
ぷらなどを揚げるのに用いていた。

○八月八日

「まゆかき」 出来上がった繭をまぶ
しから取り出す作業。

「出荷」 繭の出荷。

「固くしめた」 しっかりした繭だっ
た、の意。当時の繭は富岡などに出荷
した。

○八月十日

「まゆぬき」「まゆかき」と同じか。
「いくら出るのか心配だ」 どれほど
の値がつくのか心配だ。

○八月十一日金曜 曇

毎日の雨でまゆの出荷が心配でしたが
家では一番早くいったのでとても好都合でした。
四十五メ四百目で想像通り取りました。
養蚕中のいろいろな気持ちもやっと安心した。
棚おろしをしてすっかり掃除をしたのでなほ気持ちよかった。

○八月十二日土曜 晴

やっとはれ上がったのでこもや「す」などをあらった。
彼岸の中日でした。
はじめてつばき取りにいつて来た。

○八月十三日日曜 晴

一日つばき取りをした。
こもは今日まで全部洗って、ほし上げた。

○八月十四日月曜 晴

さき山の白菜の虫取りをした。
午後から葉玉ねぎをまいた。

○八月十五日火曜 晴

婦人会の役員会で学校へいった。
いろいろの行事を決定した。
運動会に参加することにした。
夜はまゆ勘定でみんなきた。
たいしたお金をいただいてみんなよろこんで帰った。
喜代子が石巻へいくのでおそくしばやへいつて来た。
まゆ代 四万円ばかり取った

○八月十六日水曜 曇

今日は大安日なので小間屋へ庭ぬりするため土運びをした。

○八月十一日

「毎日の雨でまゆの出荷が心配でしたが」
「道中の天気を心配している。相
川までリヤカーで運ぶため、雨だと繭
が濡れてしまう。」

○八月十二日

「す」 竹製の簀棚。

○八月十五日

「運動会に参加することにした」 婦
人会として運動会に参加することを決
めた。

「まゆ勘定」 繭の売上げ金。

「みんな」 当時は近所の十軒ほどが
養蚕をしていた。

○八月十六日

「小間屋」 作業場。川沿いにあった。
「庭ぬり」 土間をきれいに修繕する
ために、粘土と塩水を混ぜたものをコ
テでならすこと。乾燥してヒビ割れし
ないよう、粘土には藁を混ぜていた。

喜代子が石巻へ行った。

○八月十七日木曜 曇

へらなをやとり方をした。あと運動会のじゅんぴをした。

○八月十八日金曜 晴

新の九月二十九日で大運動会でした。

よいお天気でほんとにみんな喜んで見物した。

次郎と二人で写真をとった。

○八月十九日土曜 晴

しば屋へ稲刈りにいった。

女の人ばかり六人いって夕方までかかった。

たのしかった。

○八月二十日日曜 晴

さき山へ移植麥を蒔いた。

午後は、かつを釣りが早くきてはやす峯へいって

桑畑をうなった。

○八月二十一日月曜 晴

豆の草取りをした。

さしみずの桑畑をとった。

○八月二十二日火曜 晴

さしみずへいって小麥まく所をうなった。

船はさばを釣って来た。

夜は稲刈りの準備をした。

○八月十七日

「やとり方」 土寄せ。

○八月十八日

「大運動会」 小中学校の運動会。

「次郎」 八重子の次男。

「写真をとった」 運動会するときなどは飯野川から写真屋が来た。

○八月二十日

「移植麥を蒔いた」 麦の苗を移植したか。

○八月二十三日水曜 曇

今日は稲刈りでした。

朝にモーターで十人行き、私は後から自動車について夕方までやっと終わった。

モーターはまた迎いに来てとてもよかった。

夜はみんなで酒もりをした。

○八月二十四日木曜 雨

雨ふりなのでやすんだ。

とてもさむくてかぜひきをした。

○八月二十五日金曜 曇

一日中ねた。頭がいたくておきて居られなかった。

そろそろ畠も桑畑に蒔き方をしはじめた。

○八月二十六日土曜 晴

やっと起きて朝おばあさんと二人で

まるきなわをこしらへた。

さしみずへ小麥を蒔き始めた。

しばやへ女の子が生れた。

○八月二十七日日曜 晴

稲をさげた。

青年団の運動会でした。

正子を田へつれていって残念でした。

朝、四時頃おきて歩いた。

八人で月濱から船をかりて運んだ。

トラックで無事に二回はこんだ。

みんなに手つだっていただいて夕方早く終わった。

夜はうんと酒もりやら踊りやらでにぎわった。

○八月二十三日

「自動車」 親戚から借りたオート三輪のことか。

○八月二十六日

「まるきなわ」 稲藁で作った縄。ものを束ねるのに用いた。

「おばあさん」 八重子の養母あきゑのことか。

「女の子」 福三郎（八重子の弟）の長女、タキ子。

○八月二十七日

「稲をさげた」 はさがけ（収穫したいねの天日干し）をした。

「青年団の運動会」 集落対抗の運動会。男女が一緒に競技する。棒高跳び、走り幅跳び、リレーなどの種目があり、大変な熱戦だった。

「正子」 八重子の妹。

「残念でした」 運動会に参加できずに残念だった。

「運んだ」 稲を運んだ。

「トラック」 相川の小山製材所所有のトラック。

「みんなに手つだって」 集落の男性が総出で八重子宅の稲下げを手伝っ

○八月二十八日月曜 曇

桑畑の草取りをした。

少しうないはじめました。

風呂へ種をいれた。大麥二升、小麥二升です。

夜はしばやへいって乳をのませて来た。

きよ子が石巻からなつかしい便りをよこした。

早速書いてやらねばならない。

○八月二十九日火曜 曇

はやす峯へいってうない方をした。

○九月一日水曜 晴

はやす峯の桑畑にはじめて種おろしをした。

麥は夕日に、小麥はおきをもてにまいた。

まへ山の桑畑にも小麥をまいた。

○九月二日木曜 雨

雨ふりなのでぬい物をしてやすんだ。

佐喜子の明着をぬった。

○九月三日金曜

さき山へ小麥まきをした。

○九月四日土曜

あななぐちの豆ひき。

○九月五日日曜

日曜なのでお昼をもって行って、うない方をした。

大きい畠を終わった。

た、ということ。当時の藁は海苔簾やわらじなどを作るのに使われ、生活上の必需品だったが、小指には大きな田がないために大量の藁は貴重品であった。手伝いのお礼として八重子宅では酒でもてなし、藁を提供した。

○八月二八日

「風呂へ種をいれた」 消毒と発芽促進のために、種をぬるま湯につけたか。

「二升」 一升は一・八リットル。

「乳をのませて来た」 タキ子のことか。

○九月一日

「おきをもて」 地名。ハヤスミネの中の海側の土地。

○九月二日

「明着」 晴れ着。

○九月六日月曜 曇

種蒔きをした。相川の麥を少しまいた。

○九月七日火曜 曇

残りをうなつてまいてさしみずへいった。

○九月八日水曜 曇

お祭りなので仕事はやすんだ。

とみのさんとお茶のみをした。

家神様へ参拝した。お建替をした。

○九月九日木曜 晴

やき山へ今日からいつて二回半かった。

○九月十二日日曜 晴

はやす峯へ今日からいった。

一日でうまった。

○九月十四日火曜 晴

さき山へいった。

○九月十六日木曜

さき山を午前中に終わって

あと何もほりをした。

○九月十七日金曜 晴・雨

何もほり。

○九月六日

「相川の麥」 相川から譲ってもらった麦。

○九月八日

「お祭り」 小指集落の神社の秋祭り。毎年この日に行う。

「とみのさん」 小泊に住む八重子の同級生。

「家神様」 メゲ（八重子宅）の家神は小指の浜の方（もともとのメゲがあった場所）にあった。

「お建替」 家神の建て替えのことか。

○九月九日

「二回半」 不明。大麦まきのことか。

○九月十二日

「うまった」 畝を作った。大麦の畑か。

○九月十六日

「何もほり」 サツマイモ掘り。

○九月十八日土曜 晴

いも畠をうなつた。

午後から稲こきをした。八時頃終わった。

○九月十九日日曜 晴

朝にもみを俵した。

十六俵ばかり取った。

去年より少なかった。

○九月二十日月曜 晴

まえ山をうなつたり蒔いたりした。

豆はさつぱりみのらなかった。

しばやの稲こきで正子がいった。

○九月二十一日火曜 雨

雨ふりでたいした波立ちで、船を道路までひき上げた。

○九月二十二日水曜 晴

朝は柿拾ひをした。

せんたくをしてお昼をたべてから

やき山へそば刈りにいった。

風はたいしてあてなかった。

○九月二十三日木曜 晴

小麦を少しまいた。

たらないと思つて追加した。

さつまいもを貯蔵した。

○九月十八日

「稲こき」 脱穀。

○九月十九日

「俵した」 俵に入れた。

○九月二十日

「蒔いたりした」 麦の種を蒔いた、
か。

○九月二十二日

「柿拾い」 当時はサシミズに柿の木
を植えていた。

「あてなかった」 吹いていなかった。

○九月二十四日金曜 日本晴
そば打ちをした。玉ねぎを植えた。
相川から苗をかった。よい苗です。
五百ばかりあった。

○九月二十五日土曜 晴
はやす峯であづきもぎをした。
むしろ五枚ばかりとった。
桑畑をうなった。
網そめして二日かかった。

○九月二十六日日曜 曇
正子と二人で桑畑をうなった。

○九月二十七日月曜 雨
雨ふりでやすんだ。

○九月二十八日火曜 雨
米の配給にいつて十日分で一千三百三十五円代はらった。
午後から (以下空白)

○九月二十九日水曜 小雨
今日もぬい物をした。
小泊の叔母さんが来てゆつくり夕方帰った。

○九月三十日木曜 曇
桑畑をうなった。

○九月二十四日
「苗」 玉ねぎの苗。

○九月二十五日
「あづきもぎ」 小豆の収穫。
「むしろ」 収穫した小豆はむしろに
広げた。
「網そめ」 漁網を染めること。当時
は現在のような化繊製ではなく痛みや
すかったため、腐食防止として行った。
カサキという木の厚くて堅い樹皮を剥
いて煮て、その渋を染料とした。

○九月二十八日
「米の配給」 当時は全員が水田を持
っているわけではなく、米が配給され
ていた。

○九月二十九日
「小泊の叔母さん」 八重子の叔母キ
ク（八重子の実母はつえの妹）。

○十月一日金曜 曇

教育委員選挙でいつて来た。

後ははやす峯へいつてうなつて来た。

お昼から小雨で柿拾ひにいつて、正彦とずぶぬれになつて来た。

○十月二日土曜 曇

ぬいものをして居た。

はんてんを裁ち切りました。

少しぬい始めた。

○十月三日日曜 晴

さしみずに桑畑ほりにいつてきた。

○十月四日月曜 晴

青年団の大根ひきです。

一人でうなつた。

今日はほしいものをこしらへた。

○十月五日火曜 晴

白菜をひいた。

今年はとても結球をしたので、家中よろこんだ。

○十月六日水曜 晴

麥うえをした。寒さは今日からとてもきびしくなつた。

○十月七日木曜 晴

今日も植替をした。とても寒かつた。

○十月一日

「いつて来た」 中学校に行つてきた。

○十月二日

「裁ち切りました」 布を裁断した、の意。

○十月四日

「青年団の大根ひき」 青年団が持つ畑での大根の収穫。

○十月五日

「ひいた」 収穫した。

「結球」 白菜がきれいにできているさま。

○十月七日

「植替」 何の植え替えか不明。

○十月八日金曜 晴

大根引きをした。

大きな大根ばかりたくさん取りました。
運ばんはとてもひどかった。

○十月九日土曜 曇

今日は白菜を洗ったりつけたりしました。
とても忙しかった。

福三郎の船が新聞にあがったのでとても心配した。
無線局へ電話をかけて聞いて来た。
船は港へはいったとのことでした。
夜は雨が降って来た。

○十月十日日曜 曇

お父さんが石巻へ行ってまゆ勘定をうけて来た。

○十月十一日月曜 晴

桑畑をうなった。

○十月十二日火曜 晴

大根の残りを引いた。
あと玉ねぎをうえた。

○十月十三日水曜 晴

分家の豆打ちで正子と二人でいった。

○十月十四日木曜 晴

うちの豆打ちでした。
お手伝いがたくさんきて早く終わった。
夜は紙うりさんが久しぶりにきて

○十月八日
「ひどかった」 大変だった。

○十月九日
「福三郎の船が新聞にあがった」 福三郎が出稼ぎ先で乗っていた船の記事が新聞に載った、ということ。北海道方面での出漁中に台風の余波などの事故に遭ったか。

○十月十三日
「豆打ち」 豆の入った袋を打ちつけ、殻と実に分ける作業。

○十月十四日
「紙うり」 和紙売り。年末に張り替える障子紙を購入した。

いろいろ話かたりをした。

○十月十五日金曜 曇

たこの口開けでしたがさっぱり釣れなかった。
うちでは三メ目だった。

今夜も紙うりさんがきて、麥の手入をきいた。
とてもためになった。

○十月十六日土曜 曇

麥ふみにいって来た。

紙うりさんに畠までいってもらった。

○十月十七日日曜

福三郎達が来て、志津川へモーターで

送って行った。

前山へこやしかけをした。

○十月十八日月曜 曇

さき山へ麥ふみをした。

○十月十九日火曜 曇

今日は風が吹いて、畠はやめて
ほしいをこしらへた。

○十月二十日水曜 小雨

ほしこをあみかたをした。
お昼から雨がふって来た。

○十月十五日
「麥の手入を聞いた」 麥の手入れに
ついて教えてもらった。

○十月十六日
「麥ふみ」 麥を踏みつける作業。 麥
の適正な成長を促すために行われ、霜
柱を防ぐ効果もある。

○十月二十日
「ほしこ」 サツマイモを薄く切り、
ひもでつなげて屋外に干したもの。お
やつとして食された。
「あみかた」 ほしこをひもでつなげ
る作業。

○十月二十四日日曜 晴

私達のけいやくでした。
家はてる子の家でした。
たのしく一日を過ごしました。

○十月二十五日月曜 晴

かや刈りをして後、麥ふみをした。
正子はしば取りをした。

○十月二十六日火曜 晴

こやしかけをした。
さしみずに六だんかけた。
あななぐじに十一だんかけた。

○十月二十七日水曜 晴

しばやへこやしかけにいった。
正子は土入れをさせた。

○十月二十八日木曜 晴

はやす峯へこやしかけをした。
十七だんつけた。
車で馬にひかせた。

○十月二十九日金曜 曇

はやす峯へ土入をした。

○十一月一日土曜 雨

雨ふりでした。

○十月二十四日
「私たちの契約」 観音講（前出）。

「家」 観音講の当番の家のこと。

○十月二十六日
「こやしかけ」 桑畑に肥料をまいた。

○十一月一日

大根つけをした。かごやさんが居た。

○十一月二日（十二月十日）日曜 晴

消防演習で家で幹部達の接待をした。

○十一月三日月曜 晴

はやす峯へ馬でこやしかけをした。

九だんつけた。

全部で二十六だんつけた。

○十一月四日火曜 晴

土入をした。

○十一月五日水曜 晴

今日も土入をした。

○十一月六日木曜 はれ

あななぐちへ中耕をした。

するめつりにいった。

三十五枚づつ分けた。

○十一月七日金曜

麥の中耕をした。

するめは百枚づつわけた。

○十一月八日土曜 晴

今日も同じくさくりきりをした。

「かごやさん」 岩出山（前出）の方から竹細工の籠を売りに来る人。

○十一月二日

「消防演習」 消防団の演習。

「幹部達の接待をした」 八重子の養父、彦一郎が消防団の団長または副団長を務めていたため。

○十一月六日

「中耕」 作物の生育途中にうね間の土を軽く耕すこと。除草が大きな目的だが、土に空気がまざり柔らかくなるなどの効果がある。耕した土は作物の根元に寄せる。「さくりきり」と同じ。

「するめつり」 イカ釣り、の意。イカのことをするめと呼び、よくとれた。また、釣ったイカは開いて干した。竹の先に松脂を入れ、杉の葉で点火する「トボシ」という道具を使い、光に寄る習性を利用して夜間に漁を行った。夏イカは小さいため、この時期に出ることが多かったが、寒い時期の夜の漁となるために船に火鉢を積んでいた。

○十一月八日

「さくりきり」「中耕」に同じ。

するめ釣りは三百枚づつ分けた。

○十一月九日日曜 雨

するめさきをした。

おばあさんを見に小泊の叔母さんがきた。

○十一月十二日（十二月二十日） 晴

鱈網に始めて行つて来た。

するめ釣りは百二十枚分けた。

○十一月十三日木曜 曇

米つきにいつて来ました。

七表ついてきた。

さくりきりをしました。

するめつりは十五枚分けた。

○十一月十四日金曜 晴

鱈網たぐりがいつて、相川へいつて四メ売つて来た。

値段は一メ目百二十円。

するめは七十枚。

○十一月十五日土曜 晴

毎日網ほしをして、それから夕方するめつり

二百枚づつ分けた。

○十一月十六日日曜 雨

するめほしをして砂糖の配給にいった。

トラックが川へてんぷくをして、みんな手伝つて上げ方をし

○十一月九日

「おばあさんを見に」 八重子の養母あきゑを見舞いに。あきゑはもともと病気がちだった。

○十一月十二日

「始めて」 今年初めて、の意。

○十一月十三日

「さくりきり」 うねの間を軽く耕し、作物の根元にその土をかける作業。

○十一月十四日

「鱈網たぐり」 タラなどの魚をとる手繰り網漁。手繰り網は引き網の一種。

○十一月十五日

「網ほし」 タラ網の手入れ。

○十一月十六日

た。

家でもご飯を煮てやった。
するめは二十枚分けた。

山崎薬屋さんが来て泊まった。

○十一月十七日月曜 晴

網たぐりがいつて来た。

魚は九メ目ばかりした取れなかった。
するめは船中で十六メ六百釣った。

○十一月十八日火曜 曇

網さしにいつて来た。

○十一月十九日水曜 晴

魚は池田さん渡しで十五メ三百目とった。

千代子が気仙沼へいった。

妹がかわいそうでほんとうにやりたくなかった。

前の晩は、とみ子や和子と十一時まで話かたりをして来た。

○十一月二十日木曜 晴

待ちにまった鮑の開口です。

風が吹いたし今までにない寒さでした。

五メ目しか取らなかった。するめは三メ目つった。

六十円で飯野川から買いに来た。

二十五メばかりやった。

○十一月二十一日金曜 曇

今日も鮑は取れなかった。

「家でもご飯を煮てやった」 手伝った人たちへ炊き出しをした。

「山崎薬屋」 富山県の薬屋（前出）。

○十一月十八日

「網さし」 漁の網を海に入れること。

○十一月十九日

「池田さん」 不明。

「千代子が気仙沼へいった」 気仙沼へ働きに行った、の意。当時は志津川まで船で行き、そこからバスで気仙沼まで行った。

「妹がかわいそうでほんとうにやりたくなかった。」 妹の千代子は身体が弱かったので、遠方へ働きに出るのをかわいそうに思ったか。

「とみ子」 前の家（屋号イリ）の人。とみ子の祖母と八重子の夫・千代治郎の父が兄弟。

「和子」 メゲの分家、シタシバヤの女性。

二メ目とって来た。
するめは船中で五メ釣った。

○十一月二十三日日曜 晴

寒いので家の仕事をした。
夕方はだんごをこしらへておいしく食べた。

○十一月二十四日月曜 曇

夜から今年始めての大雪でした。
寒さは又例年にないようです。
油すめをした。
たいしてこまないので、ゆっくりすめた。

○十一月二十五日火曜 晴

今日はしばらくぶりで海はしづかなので網船はいつて来た。
魚は少しとった。

○十一月二十六日水曜 くもり

魚は四メ目ばかりしかうらなかつた。
炭一俵を取りかへて来た。
一俵二百五十円で魚は一メ三百目をいて来た。
それに先に貸してをいたのを百二十円たしてもって来た。
米若さんの浪花節を聞いてとてもうれしかった。

○十二月二十八日日曜 晴

餅つきでいそがしかった。
寒さはとても身にしみた。
たたみ屋が来てお昼を食べてから夜までに終わって帰った。

○十一月二十四日
「油すめ」 椿の実を機械にかけて油を搾る作業。
「たいしてこまないで」 精油所があまり混雑していなかったのだ。

○十一月二十六日
「炭一俵取りかへて来た」 物々交換で炭を貰ってきた。
「米若さんの浪花節」 浪花節は当時娯楽として流行していた。米若さんは唄い手の名か。

○十二月二十九日月曜 晴

たら網は今日は二日目です。十四・五メ取った。

相川へ魚をまつりに行って来た。

これで今年の年も一家みんな丈夫で暮らしました。

夜は福三郎が来てお茶のみをした。

魚代は五千円づつ持っていった。

○十二月二十九日

「魚をまつりに行って」 魚を親戚な

どに配ること。

「魚代は五千円づつ持っていった」

今までの魚代を精算しにいった。

昭和二十六年

○正月一日火曜 晴

しづかなよい天気でほんといよい元日です。
毎年のように酒のみが来て酒もりをしていた。
千代子も来たので夜はみんなでしば屋へお茶のみにいった。
た。

○正月二日水曜 晴

たら網は出初めをした。
十五メばかり取って相川へうって来た。
髪をあらった。
雪しぐれで寒かった。
せんたくは夕方少しだめした。

○正月三日木曜 晴

今日は五・六メばかり取った。

ぬい物を少しはじめた。木綿妹の裏物を買った。
八百円代買った。

○正月四日金曜 晴

魚は少しだが志津川へ油の配給を受けて来た。
魚代から三千円やった。
昨日石巻から喜代子が泊まりにきて、家へ行って
お茶のみをしてきた。
太ってかわいらしくなった。
二百円（うどん代）

○正月五日土曜 曇小雨

学校でお話があったので聞きにいった。
講師は県の児童福司事鈴木先生で大へん有益なお話でした。
家庭環境が第一である。

○正月二日
「雪しぐれ」 雨まじりの雪。

○正月三日

「木綿妹の裏物」 妹の木綿の着物の
裏地。

○正月五日
「児童福司事」 児童福祉司。

父や母は畠であるから、愛情を以って子に接すること。
冷胆＋無智＝不良
愛情も過ぎては不良のものである。
婦人会の集まりは少ない。

○正月六日日曜 晴

風が吹いて網船は休んだ。
柳津の人が来ている話かたりをした。

○正月七日月曜 晴

お正月になってから始めての寒さでした。
鱈もさっぱりとれないので
家の船は網はみんなあげた。
新三郎伯父さんが急に死んだ。
今までとてもよくてよろこんで居たのだが

全く惜しい人です。

○正月八日火曜 晴

家でぬい物をした。
千代子と正子も居て三人でした。

○正月九日火曜 晴

新三郎伯父さんのおそう式でした。
たいした寒くはなかった。

○正月十日木曜 大雪

夜からの吹雪でずいぶん降った。
全国的に相当のふりでした。

○正月六日
「柳津」 現在の宮城県登米市津山町
柳津。

○正月七日
「新三郎伯父さん」 八重子の妹智恵
子の義父。

○正月十一日金曜 曇

子供達の注射でみんなでいったら
役場から人がこないのもどつてしば屋で
お茶のみをして来た。

夜は東京のひろ左右門伯父さんがきて
いろいろ国の情勢を聞いて
日本の立場をわかった。

○正月十二日土曜 晴

今日は又注射で二人連れて行って来た。
二百円 小使

○正月十三日日曜 曇

ぬいものをした。
海はさっぱりなんの魚もなく毎日に家に居ます。

○正月十四日月曜 晴

家の上を刈りはらいをした。
明るくなったので気持ちよかった。

○正月十五日火曜 晴

学芸会を見にいつてきました。
正彦もとてもよく出来てうれしかった。
佐喜子ばかり連れていった。
夜はみんなに酒をのませました。

○正月十六日水曜 曇

今日は一日あそんだ。
相川へ石けんを買いにいつて来た。
夜はいりへいってお茶のみをしてきました。

○正月十一日
「子供達の注射」 予防接種。
「ひろ左右門伯父さん」 新三郎の弟。

○正月十四日
「家の上」 家のすぐ上の山。

○正月十五日
「学芸会」 小学校の学芸会。

○正月十六日
「石けん」 洗濯用の石鹸。
「いり」 屋号。

○正月十七日木曜 晴

朝はじめて木をつみにいって来た。
今まで休んだのでとてもこわかった。
参拝をしてごはんを食べた。

夜は横屋のおばさんの所へいってゆっくりお話をして来た。

○正月二十日日曜 晴

磯の口開で二人づつ出て
ふのり取りをしてみんなで分けた。
婦人会の役員会で四人いった。

○正月二十一日月曜 曇

のりとまつもとった。
いそから来て学校へ養蚕の演芸会を見て来た。
たいしたよいものでなかった。

しばらくぶりでお客さんがあった。

○正月二十二日火曜 曇

今日はみんな出てふのり取りをした。
一ふごづつとった。さっぱりときれいにとった。
米の配給で千五百円。

○正月二十三日水曜 曇

二人づつ出て、ひじき刈りをした。
寒いのでひどかった。
小雨がふってきた。

○正月二十四日木曜 雨

小泊のおばさんがきてしばらくぶりで泊まった。

○正月十七日

「木をつみに」 木を荷車で家まで運ぶこと。
「こわかった」 疲れた。

○正月二十日

「みんなで分けた」 部落内の人みんなで分けた。
「婦人会」 部落の婦人会。

○正月二十一日

「養蚕の演芸会」 養蚕組合主催の演芸会。

○正月二十二日

「ふご」 竹編みの小型の籠。一ふごは籠一つ分のこと。

○正月二十四日

電気がこないのでランプをつけた。

○正月二十五日金曜 曇

朝はれ上がったと思って、のりを洗って来てぶった。
半分でやめた。すっかり曇った。

かみのやえのおばさんがきてお茶のみをした。

○正月二十六日土曜 晴

やっとよいお天気でほし物で忙しかった。
のりは四十五枚とった。

○正月二十七日日曜 晴

いそものが乾し上がって売り方がみんな行った。
バスに乗って満員でした。

○正月二十八日月曜

家に居ていろいろかたつけたりお支度をした。

○正月二十九日火曜 雪

大室へお見舞いにいつてきた。
はつみさんと孝子と三人でゆっくり夕方までかかった。

○正月三十日水曜 晴

春の雪ですっかりとけ始めた。
又も年越しでごはんを早くたべた。

○二月一日木曜 晴

餅のおしたくで早く起きた。
いそへもいかぬので、ゆっくりおいしく食べた。

「電気がこない」 停電。

○正月二十五日

「かみ」 屋号。

「やえのおばさん」 八重子宅の向かいの真ん中の家の女性。

○正月二十九日

「はつみさん」 イリの人。

「孝子」 シバヤの人。

しばまるきにいつて来た。

○二月二日金曜 晴

しばまるきにいつてきた。

売り方はやつと帰った。

全部で八千円ばかり持ってきた。

○二月三日土曜 晴

いその開口でした。

みんな出たので一日でさっぱりと取りました。

のりぶちをした。

四十一枚ぶった。

○二月四日日曜 晴

今日は二人づつでて、ひじきとりをした。

村長さんが来た。奥さんと二人で海岸まで見にいった。

女子青年団が料理のけいこをした。

いそへいつてから出た。

○二月五日月曜 晴

ひじきを煮た。

午後からお手つだいにいった。

○二月六日火曜 晴

新三郎伯父さんの法事でした。

天気もよくしづかでとてもよい日でした。

夜は相川へ石巻の人がきて子供をたくさんもたないお話でした。

○二月四日

「村長さんが来た」 八重子の養父、彦一郎が収入役を務めていた関係で、村長が来宅したものと思われる。八重子は村長の奥さんを案内したのでろう。

「女子青年団」 未婚の女性で構成される青年団。

○二月六日

「子供をたくさんもたないお話」 家族計画を促す話だったのでろう。

二十人ばかり集まってとても面白い又得るところがたくさん
ありました。

○二月七日水曜 晴

くちよせに志津川へ家の船でいきました。
私はさき山へ麥ふみにいった。
ひじきを一人づつでて刈った。

○二月八日木曜 晴

麥ふみをした。
風が吹いてとてもひどい。
夜はおしたくをした。

○二月九日金曜 晴

よいおししいりです。
いそまつりは、あつむかいでした。
今年はちらすづしをしておいしく食べた。
写真取りが来て家でみんなとった。
おばあさんもとった。

○二月十日土曜 曇

麥の草取りをした。
学校の人夫に男達がでた。

○二月十一日日曜 晴

さき山へ第一回こやしかけをした。
二十四だんつけて終わった。

○二月七日

「くちよせ」 亡くなった人がイタコ
と呼ばれる盲目の巫女に憑依して話を
すること。
「志津川へ家の船でいきました」 イ
タコを迎えに志津川まで行った。

○二月八日

「おしたく」 食事の準備。

○二月九日

「あつむかい」 屋号。

○二月十日

「学校の人夫」 相川中学校の建設作
業。

○二月十二日月曜 晴

家に留守ばんをして米の配給にいつてきた。
午後からいりにおすたまりにいった。

配給代金 三千百二十円

○二月十三日火曜 晴

いりに正子が手伝いにいった。
わたしはおふるまいにいった。
りっぱなごちそうでした。

○二月十四日水曜 晴

彼岸の中日でだんごをこしらいて先祖の仏様におがんだ。
婦人会の役員会で学校へいった。
改選期なので分散会でいろいろのごちそうでもよかった。
小指からは三人だけいった。

○二月十五日木曜 晴

はやすみねへこやしがけ。十二だんつけた。
なみだは前の日と合わせて十四だんつけた。
麦はかれ葉が出てよくないが、こやしかけはやめた。

○二月十六日金曜 晴

毎日風が吹いてさむい。草取りをした。
桑切りも始めた。
三月二十三日の授与式で正彦が賞状をたくさんいただいた。
夜はお祝いに校長先生はじめ六七人の人達がきて酒もりをした。
おじいさんの喜びは言ひ表すことが出来ない。

○二月十七日土曜 晴

今日は中学校の卒業式です。

○二月十二日
「おすたまり」 慶弔等の際の食事の手伝い。

○二月十四日
「分散会」 解散会。

○二月十六日
「六七人」 六、七人。
「おじいさんの喜び」 村長が他の小学校の式典に出席のため、八重子の養父彦一郎が村長代理として相川小学校の式典に出席、孫の正彦に自ら「村長賞」の賞状を授与した。

○二月十七日

家のおとうさんは今日も村の代表で学校へ出た。
夜は又酒もりをした。

○二月二十日火曜 雨

雨ふりでいそはやすんだ。
春とはいひ風が寒くてひどかった。
ぼろぬいをした。

○二月二十一日水曜 みぞれ雪

ゆきまじりの雨ふりでひどかった。
よその人達が佐喜子をききにきた。
かぜひきでしたがよほどよくなった。
夜まで降った。

○二月二十二日木曜 晴・くもり

今日は晴れ間があるので、のりぶつをした。
私はお手つだい。
及川さんのところではりっぱな法事をした。
しづ子もきた。

○二月二十三日金曜 晴

のりぶつをした。
おとうさんは仙台へいった。
家の仕事をした。
男達はけいやくでやすんだ。
選挙の話でだいぶさわいだそうでした。

○二月二十四日土曜 晴

女のけいやくでやすんだ。

「おとうさん」 彦一郎。

○二月二十日

「ぼろぬい」 衣類の修繕。

○二月二十一日

「佐喜子をききにきた」 肺炎になっ
ていた八重子の長女、佐喜子の見舞い
に来た。

「かぜひき」 ここでは、佐喜子の肺
炎の意。

○二月二十二日

「及川さん」 小泊の親戚。東京から
疎開し、相川に家を建てて床屋を営ん
でいた。八重子の夫、千代治郎の妹の
嫁ぎ先。

「法事」 及川のおばあさんの葬儀。

家ではすばやで味噌を煮た。

千代子や和子、正子たちでにた。

おかへいった。

のりは今日までかかった。

百三十枚、二十五枚たのんだ。

婦人会の役員をきめた。

○二月二十五日日曜 晴

私はやき山へ麥の土入にいった。

正子はみそだまつるしをした。

あななぐちへ草取りにいった。

○二月二十六日月曜

草取りにいつてきた。

○二月二十七日火曜

お昼から小雨がふつてきた。

正子らは明日の中学校落成式の準備で相川へいった。

どうも明日の天気が心配です。

月浜からお客さんが来てお昼をたべていった。

売上金高 二千円

○二月二十八日水曜 雨

折角待ちに待った落成式も雨でひどかった。

私は婦人会の方からお客さんの接待にたのまれていった。

たいしたにぎわいでした。

教室がせまくてぎっしりでした。

おばあさん達の敬老会でみんないった。

○二月二十七日
「中学校落成式」
相川中学校の落成式。

○二月二十九日木曜 晴

昨日の雨も今日はすっかりはれ上がって、
消防演習もとても都合よかった。

中学校で始めの集まりであった。

終わって家へも相川の若い人達がたくさん来た。

栄一さんが泊まった。

おひるまえに玉菜をうえた。

午後からあななぐちへ草取りにいった。

○三月一日金曜 晴

磯の開口でした。

波立ちでしたが海苔はとった。

草取りに行った。

正子は分家へいもまきにいった。

○二月二十九日

〔栄一さん〕 不明。

〔玉菜〕 キヤベツ。

○三月一日

〔いもまきにいった〕 いも植えの手

伝いに行った。

○三月二日土曜 雨

雨ふりでいそはやすんだ。

○三月三日日曜 晴

いそへいった。大波でした。

でものは少し取れた。

草取りにいつて来た。

○三月四日月曜 晴

いそへいった。

始めてやき山へいも畠をうない始めた。

大根をおこして来た。

○三月五日火曜 晴

いその後、相川の製板から材料をはこび方をした。
分家の人達に手伝いをもらった。
夕方まですば屋まではこんだ。

○三月六日水曜 曇

いそから来て、さき山へいも蒔きをはじめた。
三だんつけてくらくなくなった。
雨がふって来た。

○三月七日木曜 雨

夜からのふりつづきで大分ふった。

○三月八日金曜 晴

朝からのりぶつをしておひるまでぶった。
お祭りで仕事はやすんだ。
おかへみんな売り方がいった。
曇ってのりはほし上がらなかった。

○三月九日土曜 晴

いも畠をうなった。
やき山を一日かかった。

○三月十日日曜 晴

今日からいも蒔きをはじめた。
和子と副三郎が来ててつだってもらった。
青年学級の開校式でいった。

○三月五日

「相川の製板」 相川にあった「小山製材所」。自山から切り出した木材を板にもらっていた。小山製材所は通常は船材などを製材していたが、家庭用の製板もしてくれた。

○三月八日

「おかへみんな売り方がいった」 海産物を内陸部に売りに行った。

○三月十日

「青年学級」 中学を卒業した青年たちが社会のさまざまなことを学ぶ場であり、学区単位で行われていた。講師は小中学校の教師が務め、週一回程度、夜間に地区の校舎に集まった。自由参加で無償だった。

○三月十一日月曜 晴

はやす峯をうなった。

道路愛護デーで人夫が出た。

お昼前私一人でうなった。

午後からこやしをもらって蒔き方をした。

○三月十二日火曜 晴

残りをまいた。

正子は青年団のいも蒔きにいった。

うり方が帰った。

売上金高 五千三百円

○三月十三日水曜 晴

やき山へ麥のきつけにいった。

後、あななぐちへ土入れにいった。

○三月十四日木曜 曇

いそへいつてのり取りをした。

後草取りをした。

○三月十五日金曜 曇

永井参拝がいった。

雨が晴れてよかった。

福三郎がいった。

いそへいった。

○三月十六日土曜 晴

いそへいつてからきつけをした。

やっと草取りを終へてはじめてした（あななぐち）

○三月十二日

「うり方」 海藻売り。八重子宅では海藻売りは分家の人に頼んでいた。

○三月十八日月曜 晴

村会議員の選挙へおばさんをつれて学校へいった。

○三月十九日火曜 晴

いそから来て小泊へいれどきにいった。

いちばんおそかった。

のりはたくさんとった。

○三月二十日水曜 晴

今日もいそへいった。

お父さんをはじめ家の人達も石巻へいった。

妹のご祝儀で明日の準備のためいった。

○三月二十一日木曜 晴

お天気めぐまれてとてもよい日でした。

妹の嫁姿を見たかった。

とてもきれいなおよめさんとのことでした。

○三月二十二日金曜 晴

いそへいった。後草取りにいった。

○三月二十三日土曜 晴

いそへいつてからのりぶつをした。

○三月二十五日月曜 晴

県会議員の選挙で学校へいった。

私の一票は当選してとてもうれしかった。

○三月十九日

「いれどき」干していた磯物を取り込みに行ったか。

「いちばんおそかった」他の人たちはすっかり取り入れてしまっていた、ということか。

○三月二十日

「ご祝儀」結婚式。

(四月三十日)

みそあせ。

○三月二十六日火曜 晴

はやす峯へ草取りにいった来た。
草は今までない位たった。

○三月二十七日水曜 晴

妹が二人で里帰りに来た。
夜はみんなでお茶のみにいった。
とてもあっさりした男でした。

○三月二十八日木曜 晴

学区民大運動会でした。

五月三日でお天気もよくてほんとに意義ある日でした。

ゆつくり見物して夕方かへった。

しばやでお茶のみをしてきた。

お母さんもうり方にいった帰った。

売上金 六千円也

○三月二十九日金曜 晴

いそへいったのりをたくさんとった。

おひるまで居た。

草取りをした。

妹がかへった。

お父さんもいっしょに上石した。

○三月三十日土曜 晴

いそへいった来た。

○三月二十六日

「たった」生えた。

○三月二十七日

「とてもあっさりした男でした」妹
の夫のこと。

○三月二十八日

「学区民大運動会」相川学区の運動
会。小学校の校庭で行い、大人たちも
参加した。

○三月二十九日

「お父さん」彦一郎。

「上石」石巻に行くこと。

それから草取りにいった。

○四月一日日曜 晴

いそ後、さき山へ麥の草取りをした。

○四月二日月曜 晴

いそへいった。正子は「きゅうり」を蒔いた。
私は草取りをした。

○四月五日本曜 晴

今日はいそもの売りがみんないった。
のり二百枚ばかりもった。
いそへいったのりを少しとってきた。
のりぶつで忙しかった。

○四月六日金曜 晴

しばやのお母さんが岩出山へいった。
家のお父さんが石巻へ行った。
養蚕の理事会なのだそうでした。

○四月八日日曜（五月十三日） 晴

婦人会の総会でした。
母の日でしたのでとても意義ある会でした。
小学校長の祝辞にはほんとに感心させられました。
動く世の中に動く子供を育てる母の重大な任務がある。

○四月九日月曜 晴

衛生検査のためみなでかたつけ方をした。
自分だけ午後からさき山へ麥のきつかけにいった。
石巻からうり方がかへった。

○四月二日
「きゅうり」 きゅうり。

○四月六日
「しばやのお母さん」 八重子の実母
はつえ。
「家のお父さん」 養父彦一郎のこと
だろう。
「養蚕の理事会」 養蚕組合の理事会。

○四月八日
「婦人会」 学区の婦人会。

○四月九日
「衛生検査」 保健所が来て家屋を消
毒する。

五千七百円（木綿一反六百五十円）

○四月十日火曜 曇（五月十五日）

今日は検査でまたかたつけ方をした。
さっぱりとしてとても気持ちよかった。
それから「からいも」の中耕をした。

○四月十一日水曜 雨

しらす取りが出た。
今日はばけつ二つ分けた。
たくさんとれるようみんなまって居るのです。
妹がお産をした。
女の子ですが、母子ともに元気だなによりでした。
家のおばあさんが泊まったのです。

○四月十二日木曜 雨

お母さんが岩出山から昼頃かへって来た。
製板代 三千二百五十円 払った

○四月十三日金曜 晴

婦人会の役員会があつて学校へいつてきた。
これからの行事についていろいろこんだんしてきた。
自分は又、援護になった。

○四月十四日土曜 曇

いそへいつてふのりとりをした。
いもの中耕をした。
はやす峯とさき山にはこやしをかけた。

○四月十一日
「しらす取り」 シラス（コウナゴの稚魚）漁。シバヤかシタシバヤの船が出たものと思われる。
「ばけつ二つ分けた」 とれたシラスをバケツ二杯ずつ分けた。
「家のおばあさん」 八重子の実母のはつえ。

○四月十二日
「お母さん」 八重子の実母はつえ。

○四月十三日
「援護」 婦人会の係の一つか。

○四月十五日日曜 晴

ふのりとりをした。
いも畠の中耕をした。

○四月十六日月曜 晴

いそへ行ってから、いもの中耕をした。

○四月十八日火曜 晴

船でいそへ行って、のりをたくさんとった。
今年は、わかめはやかましくて、とらない。

○四月十九日水曜 晴

いそへ行ってきてから、二回目の予防注射をしてきた。

○四月二十日木曜 晴

いそへいつてきた。
いもは、やき山だけこやしをかけた。
今年は発芽が悪い。

○四月二十一日金曜 曇

いそへいつてのりとりをしてきた。

○四月二十二日日曜 曇

のりぶつをしてからいそへいつて来た。
正子は青年学級でいった。
夕方小さめがふつてきた。
おかから帰った。
しらすとわかめで（六千六百円）もつてきた。

○四月十八日
「わかめはやかましくて」 前年五月
一日の取り上げに懲りたか。

○四月二十三日月曜 晴

さしみずへ桑畑ほりに妹と二人でいった。

○四月二十四日火曜 曇

田へ土入れに八人いつてきた。

なぎもよくていいあんばんいでした。

○四月二十五日水曜 晴

今日も妹と二人で桑畑をうなった。

暑い日でした。

さしみずもう少し残った。

青年団はお昼前、いものきつけにいった。

○四月二十六日木曜 曇・小雨

わかめの口開です。

天気が悪いため、ほしません。

みんな袋へ入れた。

すばやへいってお茶のみをして来た。

○四月二十七日金曜 曇・はれ

おひる頃わかめをあげて少しほした。

○四月二十八日土曜 晴

今日はよいお天気で朝から若布ほしをした。

正子と和子は石巻へ姉さんの引越にお手つだいにいった。

○四月二十三日

〔妹〕 妹の正子のことと思われる。

○四月二十九日日曜 晴

いそへいつてのり取りをした。

田へモーターでこやし運びをした。

二回運んでまに合はせた。

静かでもよかった。

わかめ売りがいった。

○四月三十日月曜 小雨

今日はしばらくぶりの雨でやすみです。

千円の支出（タガ・うどん・納税）

○五月一日火曜 雨

小雨が一日中降ってぬい物をしました。

木綿五百円と二百七十円代買った。

七百七十円。

○四月三十日

「タガ」樽に巻いてある竹。

○五月一日

「ラヂオの料金」NHKラジオの受信料。

「四・五・六」四月、五月、六月分。

それにラヂオの料金百五十円（四・五・六）の
三ヶ月分支払った。
今日も千円支出した。
正子は今日かへった。

○五月二日水曜 晴

正子は小泊へしらすほしをお手伝いにいった。
私はいそへいつてきた。

○五月三日木曜 曇

桑畑の残りをうない終わって安心した。
お茶つみをした。

○五月四日金曜 曇

小泊へいってお茶製造にいつてきた。
去年よりもよけい出来た。
小泊のおばさんに手つだいやらもらったりした。
夕方までいた。

○五月五日土曜 曇

豆蒔きをした。
麥の早い分だりやき山となみだをまいた。
節句で飯野川から見物人がきた。

○五月六日日曜 小雨

いも苗をかいにいった。
夕方追波から千百本かって来た。
とてもよい苗でした。

○五月七日月曜 晴

よいお天気でしたがいも植をした。
一人でした。
すばやの田植で正子がいった。
田仕事にいった。

○五月八日火曜 雨

田へいって夕方ずぶぬれになって来た。
雨が次第に強くなってきた。
田うえの準備をした。夜おそくまでかかった。

○五月九日水曜 晴

田植でこちらから五人いった。
あちらから四人うえ方をたのんだ。
しろかき二人モーターで白浜までいった。寒かった。

○五月五日
「だり」「だけ」の誤記か。

○五月九日
「あちら」 対岸の大川の方から。
「うえ方」 田植え。
「しろかき」 代掻き。田植え前に田
に水を張り、土を掻きならす作業。

かつを買ってきておいしくたべた。

○五月十日木曜 曇

一人で豆まきをした。

はやすみね、それからなみだへいった。

○五月十一日金曜 小雨

朝に麥を少しかり始めた。

さしみずへ小豆をまいた。

○五月十二日土曜 小雨

家に居て相川へ砂糖買ひにいった来た。

次郎が手をやけどして大さわぎをした。

夜、小室の先生にいった来た。

○五月十三日日曜 晴

小室へ手入にいった来た。

夕方波博谷の先生にいった、津の宮で泊まった。

○五月十四日月曜 晴

こちらの先生はとてもよい人でした。

今日は具合がわるくて注射を七本した。

○五月十五日火曜 晴

今日はお昼たべたてから手入にいった来た。

夕方家へ帰ってきた。

都の宮ではほんとに忙しい所お世話になった。

○五月十二日
「手をやけどして」 囲炉裏でやけどをした。
「小室の先生」 小室集落に診療所があった。

○五月十三日
「手入」 治療。
「波傳谷」 現在の南三陸町戸倉波伝谷地区。
「津の宮」 八重子の従姉妹、しず子の嫁ぎ先。

○五月十六日水曜 晴

せんたくをしてから麥刈りにいった。
午後からやき山にいった。
麥は不揃いで刈りにくい。
でもやき山は一たいにからびていた。

○五月十七日木曜 曇

さしみづへ小豆まいてきた。
桑畑にはさんだ。

○五月十八日金曜 晴

夜雨がふったので、さつまいもを植えた。
さき山へ二百、はやす峯へ三百植えた。
夕方麥刈りにいった。

○五月十九日土曜 晴

やき山へ麥刈りにいった。

○五月二十日日曜 晴

さしみずの麥刈り。
相津七号を入れた。
二だんと四まるしか出来なかった。

○五月二十一日月曜 晴

今日は田の草取りにいった。
モーターで六人いつて早く終わった。
赤くなって、家のなは悪かった。

○五月十六日
「からびていた」 雨が少なく、ひか
らびていた。

○五月十七日
「はさんだ」 剪定した。

○五月十八日
「二百 三百」 苗の数か。

○五月二十日
「相津七号」 「会津七号」の誤表記か。
大麦の品種。

○五月二十一日
「赤くなって」 稲が赤枯れ症にかか
ったか。
「な」 苗。

○五月二十二日火曜 晴

あななぐちの麥刈りを分家からお手伝いをもらってきめた。

○五月二十三日水曜 晴

今日は三人ではやすみねの刈り方をした。

しらす取りがまたいった。

ばけつ一つ分けた。

○五月二十四日木曜 晴

お天気もくたびれたようで、麥上をした。

やき山三だん。さしみず一だん二まる、はやすみねの桑畑と

も合わせて三だん入れた。とてもよい麥でした。

つや子に手つだいもらった。

○五月二十四日

「お天気もくたびれたようで」 天気があまり良くなかったので。

「麥上」 麦の収穫。

「つや子」 八重子の友人。

○五月二十五日金曜 雨

雨ふりで朝にあづきをはさんできた。

かぜむきをした。

夕方正子がさき山へさつまいもを百本うえてきた。

小泊の苗でした。

さつまいも千八百本植え付けた。

○五月二十六日土曜 晴

さき山今日から麥刈りはじめた。

朝はやすみねを刈り終へた。

さつまいもを百うえた。

全部うえ終えた。

次郎は波伝谷の先生に手入に父といった。

○五月二十五日

「かぜ」 ウニ。

○五月二十七日日曜 晴

今日はおひる前でさき山は刈り終えた。
あななぐちの麥入れをした。
四だんばかり入れた。

○五月二十八日月曜 曇

朝にまえ山を刈り上げた。
とてもよい麥でした。
やき山のからいものに、小豆を蒔いて来た。
はやす峯の麥上げをした。
三だんばかり入れた。

○五月二十九日火曜 晴

よいお天気でおひる前、さつまいも畑かえして
午後から入れた。

二だんと四まる入れた。

はやすみねから全部で五だん三まる入れた。

○六月一日水曜 晴

今日は分家のむぎ打ちで二人いった。
私はかえしかたをしておひる食べてから
さき山を入れた。
さき山は五だん二まるばかりいれた。

○六月二日木曜 曇

家の麥打ちです。
興惣治叔父さんと富士男をたのんで夕方までかかった。
雨が降って少しひどかった。
十九俵できた。

○六月一日

「二人いった」 八重子宅から二人手
伝いに行った。

「かえしかた」 麦を乾かす作業。刈
った麦を麦株の上に並べ、上下を返し
て両面が乾くようにする。乾燥が悪い
と品質が落ちるので大変重要な作業。

「さき山を入れた。」 先山から収獲し
た麦を建物の中に取り込んだ。

「五だん二丸」 約九六〇キログラム。

○六月二日

「興惣治叔父さん」 八重子の実父の
弟作兵エの息子。横屋の別家。

「富士男」 阿部富士男。横屋の人。

○六月三日金曜 小雨

今日は一日やすんだ。

雨はふったりやんだりでした。

大室や小泊から見舞いの人達 came。

○六月四日土曜 晴

今日はやき山へきむくりに弁当をもって行って

あますきめた。

小泊の田の草二番の手伝いにいった。

○六月五日日曜 晴

あななぐちにきむくりにおべんとうを持って行って

夕方まできめた。

○六月六日月曜 曇

男の人達はかぜとりなので正子と二人ではやすみねを草取り
した。

○六月七日火曜 曇

妹と二人ではやす峯をきむくりした。

○六月八日水曜 曇

今日もかぜとりです。

おひる前まできめた。

午後からさき山にいった小麥刈りをした。

夕方かなりがなって雨が少し降ってきた。

○六月四日

「きむくり」 麦を刈った後の切り株
を鋤で細かくし、土に鋤きこんで肥料
にすること。

「あます」 あらまし（だいたい）。

「田の草二番」 水田の二回目の除草。

○六月九日木曜 曇

さき山をきむくり、朝からみんなで行ってきめた。
私達はべんとうを持っていた。

○六月十日金曜 雨

今年にない大雨でしたが夕方はからりと晴上がつて気持ちよ
かった。
かみを洗った。せんたくもした。

○六月十一日土曜 曇

さしみずへ小豆のきむくり。
小麥刈りをした。
田へ水見にいつてはやくきた。

○六月十二日日曜 雨

今日はやすんだ。大工さんが来て相川へいつて
うどんと油をかってきた。

○六月十三日月曜 曇

おひるまへやすんで、あと桑畑へ馬でこやしをつけた。
はやすみねへ四だん。
私と妹はすぐ運んでちらす方をした。

○六月十四日火曜 曇

妹と二人で小麥打ちをした。
田見にいった。

○六月十二日

〔油〕 食用油（おそらく菜種油）。

○六月十三日

〔ちらす方〕 固まったこやしをほぐす作業。

○六月十五日水曜 晴

残りの麥を打った。

今日は三俵出来た。

今年は計二十二俵とった。

○六月十六日木曜 晴

田へ二ばん除草にいった。七人いつて早くきめた。

帰りは相川のトラックにのってきた。

稲はとてもよかった。

○六月十七日金曜 曇

桑畑をうない始めた。

さしみずへいった。

○六月十八日土曜 曇

はやすみねへ桑畑うないをした。

硫酸を少し入れた。馬肥もした。

大工さんが今日からきた。

○六月十九日日曜 晴

家に居て大工さんのお支度をした。

かみ洗ひをした。

夕方種むぎをとりかえてきた。

青年団のわかめとりでした。

○六月二十日月曜 日本晴

今までにないよいお天気でしたので

私は少し小麥洗ひをした。

妹はすばや屋の田の草とり、

男たちは村のわかめとりでいった。
今朝前山へ硫酸をかけてきた（桑畑）

○六月二十一日火曜 晴

若布の開口でした。

お天気がよくていいあんばいでした。

○六月二十二日水曜 晴

私はほしかたをしないで、大工さんに手伝いをして
家かたつけをした。

○六月二十三日木曜 晴

前山へなっぱ畠をかつばむすりをした。

○六月二十三日

「なっぱ畠」 葉野菜を植えた畑。
「かつばむすり」 麦の切り株を手で
むしり取ること。畑の手入れ作業のひ
とつで、葉野菜を植える準備。

○六月二十四日金曜 晴

わかめの開口です。

私達はほしかたをした。

たいした取れなかった。

○六月二十五日土曜 晴

今日もわかめほしをした。

お天気はとてもよいのでみんなよろこんでほした。

○六月二十六日日曜 晴

村で朝早くこんぶ取りをしたので

私はほしかたにいった。

田を見にいった。

いまのところはよいそうです。

○六月二十七日 月曜 曇

正子は青年団で川開を見にいつてきた。
私はいもほりをした。

○六月二十八日 火曜 曇

わかめの赤羽とりをした。
一日かかった。

○六月二十九日 水曜 曇

わかめの出荷でした。
家では七俵だした、
はやす峯のいもほりをした。

○六月三十日 水曜 晴

家の造作が終わった。
夜は大工さん達においしいごちそうをした。
りっぱに出来上がった。
とても気持ちよく大工さん等もよろこんで帰った。

○七月一日 木曜 晴

やき山いも堀りをした。
ずいぶん大きくてよろこんでほった。
向ふの畠三枚から十九でた。
こちらから十一でた。
土も毎日の天気つづきでかんそうしてとてもよかった。

○七月二日 金曜 晴

いもほりをした。

○六月二十七日

「川開」 石巻で毎年催される、旧北上川の「川開き祭り」のこと。

○六月二十八日

「赤羽とり」 ワカメの赤くなった悪い部分を取る作業。

○六月三十日

「造作」 修繕。

はやすみねから二十ばかりでた。

○七月三日土曜 晴

若布の開口でした。

お天気がよくてなによりでした。

○七月四日日曜 晴

若布の口開でほし方をしないから、午後から妹とあななぐち二ばんにいった。

○七月五日月曜 晴

石巻へ次郎を連れて手を手術をした。
とても姉さんと二人でひどかった。
子供に泣かれて涙を人知れづ流した。

○七月六日火曜 晴

今日は手を五日ばかりそのままにしておくので家へかへった。

○七月十九日火曜 晴

今日はやっと家へかえった。
十五日ばかり石巻に居た。
五千円ばかりかった。
ほし草刈りでお手つだいが出来て終わった所でした。
天気つづきでとてもよいあなばいでした。

○七月二十日水曜 晴

朝雨がふったのではやすみねへ大根まきにいつてきた。
まちにまった大根まきもやっとした。
お墓まいりにさき子と厚子と三人でいつてきた。

○七月五日
「姉さん」としゑ（とし子）。シタシ
バヤの娘で八重子の祖母（つるゑ）の
妹の子。

○七月十九日
「十五日ばかり石巻に居た」 手術後、
そのまま石巻に泊めてもらっていた。

○七月二十日
「さき子」 八重子の娘、佐喜子。佐
藤恵子の母。
「厚子」 八重子の末の妹。

虫ぼしをした。

○七月二十一日木曜 晴

すすはきをして、養蚕の準備をした。

○八月一日土曜 晴

おそい分は三時頃箱から分けた。

夜は早い分に桑づけた。五十枚ばかりです。

○八月二日日曜 晴

朝はみしょうを取って夕方は入山の赤木をとった。

○八月三日月曜 晴

朝は寺の上の赤木をとった。風が吹いて夕方は

さき山のねずみがへしをとった。

毎年二眠まではねずみかへしで育てるが、今年
は新葉がなくてしまのちをまぜた。

○八月四日火曜 晴

朝は分家のやき山をとって来て夕方はさしみず

のねずみがへしをとってきた。

夜はねあみを入れた。

○八月五日水曜 雨

妹等を桑取りにやって、私は朝からすりとりをして
夜までかかった。

「虫ぼし」 簞笥の中の衣類を干すこ
と。

○八月二日

「みしょう」 桑の種類。

「入山」 地名。場所不明。

「赤木」 桑の種類。

○八月三日

「ねずみかへし」 桑の種類。葉が柔
らかい。

「しまのち」 桑の種類。他にも、ツ
ルダ、タガスケ、ゾウガ、ロウソウと
いう種類の桑もあった。

○八月四日

「ねあみ」 蚕座の掃除（「しりとり」
をするために用いる網。

○八月五日

「すりとり」 しりとりと同じ。

○八月六日木曜 晴

雨もすっかりはれて今日は又よい天気です。

あと分を今日もすりとり、早い分十二枚を桑づけた。
一兵土をかけた。

○八月六日

〔十二枚〕 蚕卵紙の枚数。

〔一兵土〕 桑の種類か。

○八月七日金曜 晴

多い分は朝から桑づけた。

さき山のみしょうをとったし一兵土をかけた。

分家のやき山をとった。

○八月八日土曜 晴

朝は寺の上をとったし夕方は分家のをとった。

○八月九日日曜 大雨

朝の中はふらなかったが十時ごろから

風やら雨やら今までなかった。

夜はすっかりはれて居た。

○八月十日月曜 晴

朝あななぐちをとった。

私は大根にこやしをかけた。

○八月十一日火曜 晴

今日からかつを釣りが出た。

家の船は始めから金で二千円ばかり売った。

○八月十二日水曜 曇

朝からすりとりで一日中かかった。
早い分は十六枚桑づけた。
かつを志津川へ三千円代うってきた。

○八月十三日木曜 曇

小雨がふってさしみずのみしをとった。
三時頃二十一枚桑づけた。
夜は多い分をかけた。
夕方私はお母さんとさき山をとってきた。
四眠の枚数は百八十枚でした。
分家のは十八枚です。

○八月十四日金曜 晴

天気はよくなって桑取りにはとてもよかった。

さき山とさしみずにいった。
今日も桑づけた。

○八月十五日土曜 曇

おひる前はやき山をとった。
十本以上出来た。
午後はやすみねへいった。
夕方雨がふって早く来た。

○八月十六日日曜 雨

雨ふりでひどかった。
でもはれ間を見てたいしてぬれて居なかった。
あがとをとった。

○八月十三日

「四眠」 四齢から五齢の間の脱皮期。
四齢・五齢は、壮蚕と言われ、四齢は
蟻蚕ぎさん（孵化したての蚕）から二五〇〇
倍、五齢は一〇〇〇〇倍程度の大きさ
になる。

「かけた」 蚕に桑をあげた。
「お母さん」 養母あきゑのことか。

○八月十四日

「桑づけた」 蚕に桑をあげた。

○八月十六日

「あがと」 桑の種類か。

○八月十七日月曜 晴

はれ上がって助かった。

あななぐちをとった。

あとはやすみねをとった。

もち米を配給にいつてきた。

○八月二十一日金曜 曇

はやい分は上簇した。

棚は中間につった。

○八月二十二日土曜 晴

台所へ上げた。棚は二つこしらへた。

その分おかみはがらあきだった。

○八月二十三日日曜 晴

今日も台所へ上げた。

○八月二十四日月曜 晴

おかみの二かいへ上げた。

○八月二十五日火曜 曇

今日もひきておかみの下へあげた。

私達は役員会で学校へいった。

運動会のことについて。

○八月二十六日水曜 晴

朝さき山の白菜にこやしかけをした。

今日からこもぬきをした。

○八月二十一日

「上簇」^{じょうさく} 成熟した蚕を繭を作らせるために族^{まぶし}に移し入れること。

「棚は中間につった」 まぶしの棚を部屋の中に吊り下げた、ということか。

○八月二十二日

「台所へ上げた」 まぶしの棚を台所に移した。

「おかみ」 中座敷。

さきに上げたのはよかったが
ずいぶんひどかった。

○八月二十七日木曜 晴

こもぬきをした。天気がよいのですぐほした。

○八月二十八日金曜 晴

今日もこもぬきでとてもひどかった。

今年是一般にごろが出た。氣候柄だと思います。

今年は炭は十二俵ばかりだった。

○八月二十九日土曜 晴

こもは全部ほし終わった。まぶしはあまった。

かいてん簇をつかったためでせう。

今年も拾枚、去年のは八枚、十七枚だった。

○八月三十日日曜 曇

栗おとしにさき山にいつてもらった。

青年団の運動会でした。

私道路ぶしんに出た。

まゆかきはおばあさんが四メばかりぬいた。

○九月一日月曜 晴

まゆかきをした。

伯母さんと千代子だけでした。

○九月二日火曜 晴

今日までぬき終へた。

○八月二十八日
「炭」 蚕室を温めるために用いた。

○八月三十日
「栗おとし」 栗の収穫。栗は所有する山で拾った。茹でて干し、おやつとした。
「道路ぶしん」 道路普請。道路工事または道路清掃への奉仕。
「おばあさん」 養母あきゑのことか。

○九月一日
「伯母さん」 不明。

○九月二日
「ぬき終へた」 出来上がった繭を全てまぶしから取り出した。

夜は少しけばとり機でよわりをした。
私は婦人会のおどりのけいこで中学校へいつてきた。

○九月三日水曜 晴

まゆの出荷で相川渡しで大指がさきにした。
家では四十貫ばかりとった。
七十五瓦はいて四十メだと五メから少しこへたばかりでした。
作柄は悪い方でした。
今日までの苦労も一と安心といふ所でした。
夜は勘定でまゆ金は五万円ばかりとった。

○九月四日木曜 晴

村のこんぶとりで、家では、はせこしらえで
作兵エおちさんと二人でした。
私がほし方にいった。

○九月五日金曜 曇

雨模様ですが稲刈りに十人でモーターでいった。
だんだんはれてとてもよかった。
夕方は波でひどかった。

○九月六日土曜 晴

前山へくり拾ひにいつて二升ばかり、正子は五升。
みんな合わせて八升拾った。
夕方やき山へいもほりにいつてきた。

○九月七日日曜 晴

稲さげで白浜まで船でいつてトラックでさげた。
十人いつて都合よく夕方まですっかり終へた。
今年はとてもよかった。
四百五十束ばかりできた。

「けばとり機」 繭の表面についた毛
羽を取る機械。
「よわりをした」 夜遅くまで毛羽取
りをしたか。
「おどりのけいこ」 運動会での出し
物の稽古。

○九月三日
「七十五瓦」 七十五グラム。

○九月四日
「はせこしらえ」 稲を干す「ハセ」
をすること。
「作兵エおちさん」 八重子の実夫七
兵衛の兄弟。横屋の別家の人。

夜は大きかもりをしてごちそうでにぎやかでした。
安心した。

○九月八日月曜 晴

お祭りなのでみんなおやすみでした。
女の人達はおどりのけいこをした。
かつを船の勘定をして六百円づつ七人で分けた。

○九月九日火曜 曇

運動会で見物にいった。たいした人出でした。
とてもよかった。婦人会のおどりもとてもほめられた。
夕方までゆつくりみてきた。

○九月九日
「運動会」 小学校の運動会。

○九月十日水曜 日本晴

とても暖かでした。
大根にこやしかけをした。
白菜は三回大根は二回かけました。

○九月十一日木曜 晴

麥畠にこやしつけをした。
前山に麥を少しまいた。
あづきもぎをした。

○九月十二日金曜 晴

はやすみねの桑畠にこやしをはこんだ。
蒔く準備をした。

○九月十三日土曜 曇

はやすみねを蒔き始めた。
午後からさしみずをうなった。

○九月十四日日曜 雨

久々ぶりの雨ふりで作物やら人間やらみな大よろこびでした。
夏以来ぬい物は始めてしますのでなにから手をだしたらよい
か、
まづもってこてをぬいました。

○九月十五日月曜 雨

今日も雨ふりでぬいものをした。
夕方はれ上がってきた。
へらなを少しやとった。

○九月十六日火曜 晴

さしみずの桑畑を蒔いてきた。
あとやき山をうなった。
やき山へこやしつけを今日で二日つけて二十だんはこんだ。

○九月十七日水曜 晴

やき山をうなって蒔いた。
肥料石灰を使っただけで他のこやしはやらない。

○九月十八日木曜 晴

正子と二人でまめ引きもほりをして少しうなった。
夜はおいしく餅を食べた。

○九月十四日
「こて」 手甲。農作業のときにつけ
る。

○九月十五日
「やとった」 抜いた作物に土をかける作業。保存のために行う。

○九月十八日
「まめ引き」 大豆の収穫。

○九月十九日金曜 晴

やき山へ三日お昼をもっていきました。

今日は蒔き終わってきもちよかった。

肥料石灰をやき山へ二袋使った。

他の金肥は入手しないのでやらない。

○九月二十日土曜 雨

朝あなぐちへ豆ひきにいて、あと雨ふりでやすんだ。

○九月二十一日日曜 雨

今日も一日中雨ふりでぬい物をした。

はだ着をぬいなほした。

お父さんが会議から四日目にかへった。

作並温泉から山形まで見物したそうです。

○九月十九日
「金肥」 化学肥料。

○九月二十一日
「お父さん」 彦一郎。

○九月二十二日月曜 晴

私はこやしを車につんで馬にひっぱり方をした。

午後から豆ひき、あなぐちをした。

○九月二十三日火曜 曇

朝こやしをちらしてべんとうを持ってみんなでうなった。

大きい畠は終わった。

雨がふってきたので早くかえった。

○九月二十四日水曜 晴

朝になつてはれたので、だいをうなつて

はやすみねにきて夕方までうない終わった。

べんとうをもった。

○九月二十四日
「だい」 不明。地名か。

○九月二十五日木曜 曇

金肥も、石灰ちつ素一袋、過火酸一俵をあななぐちに使った。
はやすみねは朝日に過りんさんだけ用いた。
蒔き方をした。一斗五升をはやすみねまでもってきた。

○九月二十六日金曜 晴

朝に正子とだいをまいた。さき山をべんとうもっていつてう
ない方をした。
大根畠に今日まいた。

○九月二十七日土曜 晴

さき山をうなった分をまき方、こやしつけをした。

○九月二十八日日曜 晴

さき山をおひる前で終わった。
興惣治叔父さん手つだいにきたのであとはやすみねに小麥を
まいた。
夜は相川にいった。
今年は石灰ちつ素三俵、過石一俵、肥料石灰を二袋、
計三千円代買った。

○九月二十九日月曜 曇

はやすみねにさつまいも掘りにいつて
おひる前したら雨がふってきてやすんだ。
和子としみが手つだいにきた。
いもは数二十ばかりとった。

○九月二十五日

「過火酸」 化学肥料。
「過りんさん」 過燐酸。化学肥料。

○九月二十八日

「過石」 過燐酸石灰。化学肥料。

○九月二十九日

「和子」 シタシバヤの女性。
「としみ」 阿部富士男（前出）の姉。
横屋の娘。

○十月一日火曜 曇

おひる前やすんであと前山をうなって蒔いた。
和子にすけられた。

○十月二日水曜 晴

いも畠をうない終っておひる前で蒔きおえた。
あとなたねを植えた。

○十月三日木曜 曇

小間屋の庭をコンクリートにした。一日できまらなかった。
セメント三袋使った。

○十月四日金曜 くもり・雨

今日おひるまえまでかかってすっかり終わった。

留春叔父さんに今日もてつだってもらった。

○十月五日土曜 晴 (十一月三日 文化の日)

夜までひどい雨でしたがすっかり晴れてせんたく物をした。
夕方は石巻の叔父さんがきて、岩井さんと二人それに
千葉運転士さんとで大にぎわいでごちそうをした。

○十月六日日曜 晴

やき山へ豆ひき、あづきもぎをした。

○十月七日月曜 晴

あわびの口開でした。
風のためとれなかった。
次郎のたん生祝いを心づくしでした。

○十月一日
「すけられた」 手伝ってもらった。

○十月四日

「留春叔父さん」 横屋のはる子（八重子の実父七兵衛の妹）の夫。

○十月五日

「石巻の叔父さん」 八重子の養母あきゑの妹の夫、とくえい。

「岩井さん」 石巻の叔父さんの郵便局の同僚。

「千葉運転士さん」 バスの運転手か。

○十月六日

「あづきもぎ」 小豆の収穫。

○十月八日火曜 晴

今日もあわびの口開でした。私と妹は桑畑うなひをした。
はやすみねをおひるまえできめてあと稲を全部いれた。

○十月九日水曜 曇

今日は稲こきをした。
朝支度してごはんをたべてから始めた。
八俵こいた。和子に手つだいをもらった。

○十月十日木曜 曇

今日は朝からはじめた。十俵こいた。
福三郎、ちえ子、和子にすけられた。

○十月十一日金曜 晴

今日で三日こき方をした。
みんなに手つだっていただいて夕方まで全部終わった。
みんなで二十三俵とった。今までよりよいので一番とったぶんです。

○十月十二日土曜 晴・曇

今日は柿おとしをした。さしみずは今までにない位なった。
入れもので十四ばかりおとしした。

○十月十三日日曜 晴

はじめて（たこ）釣りにいったので、おとうさんに柿おとし
をしてもらった。
今日は十一車につんできた。

○十月十四日月曜 晴

智恵子の家に豆うちに正子がいった。

私は青豆を一斗二升ばかりうった。

たこつりは今日もいった。二日で二千円以上つった。

○十月十五日火曜 雨

雨ふりで一日ぬい物をした。もんぺのつくろいをした。

○十月十六日水曜 晴

石巻から玉ねぎの苗がきて五百うえた。

午後から柿おとしみんなで三十ばかりとった。

すばやへ女の子が生れた。

○十月十七日木曜 晴

やき山のいも畠をうなった。

二人で一日かかった。

○十月十八日金曜 小雨・はれ

柿よりをした。家の仕事 まゆ勘定。

○十月十九日土曜 晴

前山の大根ひき、へらなをひいた。

洗ってほした。

おそく蒔いたけどよい大根です。

○十月二十日日曜 晴

さしみずの桑畑をうなった。

○十月十八日
「柿より」 食用にする柿を選別した。

福三郎にすけられた。

○十月二十一日月曜 晴

すばやの豆うち。

私たちはもときりをした。

○十月二十二日火曜 晴

よい天気でも暖かでした。五人して豆うちをした。
三俵やと取った。早く終わって夕方大根ひきをした。

○十月二十三日水曜 晴

せんたくをしてからへらなを洗った。
夕方までかった。

○十月二十四日木曜 晴

朝に土入れにはじめていった。
けいやくでゆつくりやすんだ。
相川へ婦人会の品評会に出品物を会長宅にもって行って来た。

○十月二十五日金曜 曇

おひるまへは土入、正彦と大根をつんだ。あとかけ方をした。
つけ物はともよいのばかりです。
かへっておそ蒔きはよいようです。

○十月二十六日土曜 曇

今日は学校へ品評会を見にいった。
いろいろ出品されて居た。
家でも豆をだしたが等に入らなかった。
妹とすばやでおひるを食べてきた。

○十月二十一日

「もときり」 豆の根元を切る作業。

○十月二十四日

「婦人会の品評会」 当時は各々の家の作物を品評する会があった。

○十月二十五日

「かけ方」 縄に大根を結んで干す作業。干し大根を作る。

○十月二十七日日曜 雨

かめの子をぬい始めた。
しばらく柿たくりでぬい物をしないのでたくさんある。

○十月二十八日月曜 雨

今日もぬいかたをした。
毎日よこやへ行ってぬいました。

○十月二十九日火曜 曇

今日までかかってぬい終わった。
ちよつきを裁ちました。

○十月三十日水曜 雪

今年はじめての雪ふりでとても寒かった。あわびの開口でし

た。

にわかに綿入れの支度をしはじめた。

○十一月一日木曜 雨

今日もぬいものをした。
自分のちよつきをぬいはじめた。
あわびは今日も口あきでしたがずぶぬれでした。
少しとった。

○十一月二日金曜 曇

ちよつきをぬい終わった。
たこ釣りは三メ二百つた。

○十月二十七日

「かめの子」子どもをおぶったまま
で着られる綿入れ。
「柿たくり」柿の皮むきのこと。干
し柿づくりの作業。

○十月二十九日

「ちよつきを裁ちました」ちよつき
をつくるための生地を裁断したとい
うことか。

○十一月三日土曜 晴

消防の演習でしたが天気がよくて何よりでした。
大根つけをした。半分だけつけた。
とてもよい大根です。今年はおそ蒔きでよかった。

○十一月四日日曜 晴

桑畑を妹と二人でうなった。
べんとうをもつてさしみずをやっと終わった。

○十一月五日月曜 晴

桑畑はおひる前までかかった。
はやすみねの小麥をきつかけした。

○十一月六日火曜 曇

麥の土入をはじめた。少しぬかってひどかった。
あなぐちを終わった。

○十一月七日水曜 小雨

さつまいもをほしこをあんでかけた。

○十一月八日木曜 晴

結球白菜を洗って漬けた。せんたくをした。

○十一月九日金曜 晴

はやす峯へ土入れにいつてきめてきた。
さき山もした。

○十一月七日
「ほしこをあんで」 干すために紐で
つなげて。

○十一月十日土曜 晴

油すめに月浜にいった。

二斗五升もって油は三升と少し出た。

午後はやき山へ土入に一人でいった。

○十一月十一日日曜 晴

こやしつけをした。

家の人ばかりで馬に車をひかせて、二十だんつけた。

なみだの畑へ二十一だんつけた。

○十一月十二日月曜 晴

今日はやす峯へつけた。

二十一だんつけてまだいも畑が残った。

毎日風もないし暖かでもよい日和です。

○十一月十日
「油すめ」精油。

○十一月十三日火曜 晴

するめを始めて四百枚ばかり分けたので

ほし方をした。大根をつけた。

○十一月十四日水曜 晴

土入をした。今日で終わった。

今年は先に土入をしてこやしをかけた。

○十一月十五日木曜 曇

小雨があったのでぬいものをしてやすんだ。

小野寺魚屋が来て夜おそくまで、するめ買いをした。

かみあらいをした。

○十一月十五日
「小野寺魚屋」石巻の魚屋か。当時
スルメは業者に売れた。

○十一月十六日金曜 晴

さくり切りを一人でした。

妹はしばやへいって土入をした。

○十一月十六日

「さくり切り」 うねの間を軽く耕し、
作物の根元にその土をかける作業。

○十一月十七日土曜 晴

風が始めて吹いたので寒くて家の仕事をした。

妹が前山へ土入にいった。

○十一月十八日日曜 晴

はやすみねの残りをこやしかけをした。

正彦にてつだってもらった。寒くてひどかった。

○十一月十九日月曜 曇

料理の講習で中学校でならった。

栄養師の先生は保健所からお出でになって

とても有益なお話と実習でした。

先生の指導をこれからの生活に大いに取り入れて実習にうつ
しませう。

○十一月二十日火曜 曇

雪しぐれでぬいものをした。

○十一月二十一日水曜 晴

あわびの開口です。とても暖かでよい日でした。

ぬいものをした。

○十一月二十二日木曜 曇

今日もあわびとりです。

○十一月二十二日

大・四メ目、小・一メ八百とった。
ぬい物をした。

石巻の兄さん病気のため今日はみんないった。

○十一月二十三日金曜 晴

家の仕事をした。

○十一月二十四日土曜 晴

今年の冬は毎日暖かで春のやうです。

中学校の文化祭を見ってきました。

とてもりっぱでした。

○十一月二十五日日曜 曇

とみ子のご祝儀でおてつだいにいった。

○十一月二十六日月曜 曇

今日はたら網は始めてたぐって来たがさっぱりとれなかった。

夜は養蚕よりあいをしてみんなでさかもりをした。

今年の桑苗の代金一本五円の内金をあつめて、

二千二百本で一万一千円を小泊の先生を通じて支払った。

○十一月二十七日火曜 曇

毎日ぬい物をして、炊事をして一日を過ごすのです。

○十一月二十八日水曜 曇

今日は作兵伯父さんをたのんで、どなをないかたをした。

雨が降ってきた。

「石巻の兄さん」 前出の「石巻の叔父さん」。

○十一月二十六日
「小泊の先生」 養蚕の指導員。

○十一月二十九日木曜 小雨
今日もないかたをした。
私はおしたくをした。

○十二月一日金曜 晴
餅をおいしく食べた。
せんたくをしてたら網は波立ちで相川につけて
夕方までかかった。
たらは一かごばかりとった。
政太郎さんからもち米五升いただいた。

○十二月十六日土曜 晴
とても寒い日です。
養蚕のわく代十瓦十円の割で集めた。
小泊の先生へ渡した。

○十二月二十三日土曜 晴
追波からもち米一俵きた。
モーターでつみにいった。
今年はじめて米できた。

○十二月二十四日日曜 晴
今日はすすはきでした。
とてもしづかなよいお天気でなによりでした。
夕方まですっきりかたついて気持ちよかった。

○十二月二十五日月曜 晴
あめをこしらへた。
四時頃おきてご飯をたいて
七時頃もやしをからんで、二時一番をこした。
二ばんは夕ごはんを食べてから、夜は十時すぎまでかかった。

○十一月二十九日
「ないかた」 うない方、の意。畝を
作る作業。

○十二月一日
「政太郎さん」 まさたろう。八重子
の弟福三郎の戦友。

○十二月十六日
「十瓦」 十グラム。

○十二月二十五日
「一番をこした」 一回目の飴液とり。
糖化した米から出た液を漉す。
「二ばん」 二回目。

○十二月二十六日火曜 晴
粉つきをした。

今年は米は一斗です。
追波から粉をもらったのでとてもよかった。

○十二月二十七日水曜 晴
くさもちをつきました。

正子一人でついたのでとてもひどかった。
私はこねどりをした。
五うすにした。

○十二月二十八日木曜 晴
もちつきです。
あわびの口もあきました。
五時におきて今日も正子がついた。

今年は二斗五升ついた。
わくとりでとてもかんたんです。

○十二月二十九日金曜 晴
すばやのあめをこしらへた。
おかあさんが飯野川へいったので私がしました。

○十二月三十日土曜 晴
今まであたたかいでしたが今日は今年にない寒さでした。
くさもちはとともすみた。
今年の仕事もこれで全部おへてよい年をとりました。
夜はゆっくりお茶のみをしました。

○十二月二十六日
「粉」米粉のことだろう。大室の精
米所で作ってもらっていた。

○十二月二十七日
「こねどり」臼のそばにいて、餅を
こね返すこと。

○十二月二十八日
「わくとり」切り餅用の型。

昭和二十七年

○正月一日日曜 晴

はれたしづかなよい元日です。

みんな来て酒のみをして祝っていききました。

今年もよい年であるようお祈りいたしました。

佐々木八重子

大正七年十二月十五日生

昭和二十七年一月五日（新暦一月三十一日）没

享年三十三歳

おわりに

佐藤恵子

旧暦昭和二十七年一月五日、現在のカレンダーでは同年一月三十一日。八重子は四人目の子供を産みました。元気な女の子、次女信子です。ですがこの日、お産の事故により八重子自身はかえらぬ人となりました。

私は祖母・八重子と会ったことはありません。母・佐喜子が持っている一枚の写真でその顔を知っているだけです。写真の八重子は姿勢正しくカメラを見つめ、豪華なおくるみの長女佐喜子を抱いています。「お母さんのお母さんは、早くに亡くなっているんだよ」と聞かされても、おばあちゃん〴〵が亡くなっていることへの実感はわかず、ふうん・・・と思っていた程度でした。

八重子亡き後は千代子がそのバトンを受け継ぎました。八重子の妹であり日記にもたびたび登場しています。千代子が、幼い子供達の母となり、自らも二人の男の子を産み育てあげました。仙台、東京と生活の場を移した子供達・孫達を休みや行事の度に迎え、「これが浜のごっつお（ごちそう）だ」と海の幸をテーブルからこぼれんばかりに並べてくれました。

母・佐喜子は十代の時に小指を離れておりますので、私は休みのときに数日訪れる場所としてしか小指のことを知りませんでした。小指にいるときにもいとこ達と遊ぶことにはばかり夢中で、祖父母との関わりは正直あまり覚えていません。でも、きっと祖父母は孫達が賑やかに遊ぶ様子を見ながら笑っています。

れていたのだらうなと思います。自分の子供達がいま目の前にいる孫くらいの年だった頃、もっと前、自分達がとても若かった頃、八重子と一緒に過ごしていた頃、も思い出して。時間は八重子が暮らしていた時からずっと途切れずに流れつづけ、会うことは叶わなかった孫たち、ひ孫たちも包んでくれます。

八重子の日記は、メゲを受け継ぐ叔父叔母が二〇〇八年頃に見つけました。兄弟の間を順々に手渡されましたが、長男・正彦伯父は、この日記は次女・信子叔母が持っているといいよ、と言ったそうです。自分たちが持つ母の記憶を、信子と分け合う気持ちだったのだらうと思います。八重子が十月に縫っていた「かめの子」は真冬に産まれる信子を暖かくおんぶするための準備だったのでしょう。出産間近の身重のからだであっても、とうとう一言も自分自身のからだについて書くことがなかった八重子であり、その自制心には驚くばかりですが、弟妹、子供達への気持ちは抑えても抑えてもあふれてしまったぶんが記されていたように思えます。いわく、「妹の嫁入り姿をみたかった」「おじいさんの喜びは言葉では言い表せない」「子供に泣かれて人しれづ涙を」「誕生祝いを心づくしで」・・・

この日記を母から読ませてもらった私は、二〇一二年から一三年にかけて「八重子おばあちゃんの日記」(<http://kuresakibunko.hateblo.jp/>)として、はてなブログへアップしてきました。ブログへ掲載することで、小指から遠く離れた場所へ住む人たちにも八重子と会ってもらうことができました。そして、宮内泰介先生たちとの出会いへ結びつき、このような冊子を作り上げていただきました。

二〇一一年三月十一日の津波で、八重子が暮らし、叔父叔母が受け継ぎ、いとこ達の産まれ育ったメ

ゲの家は何かもすべて海にもつていかれました。あれから六年になろうとしていますが、十三浜小指の集落は場所を高台へ移したうえで新しい暮らしの基盤を作りつつあるところかと思います。移転先は日記の中で「アナナグチ」と呼ばれる畑だった場所です。生活のすべてを再構築していくという、途方もない大事業へ浜の皆さんはずっと取り組んでおられます。十三浜小指という場所で育まれた生活は八重子が日々記した通りこれほどまでに豊かなものでありました。叔父叔母たち、浜の皆さんが継承されている暮らしが、一日も早く落ち着いた以前と同じように満ち足りたものになることを願っております。

家族を愛し、作物や蚕を心をつくして丁寧にて育て、お日様や雨の恵みに感謝する。手間をかけることをあたりまえとして家の中を取り仕切り、おいしいものをつくり、みんなで食べる。そういった生き方の美しさを私は日記から教えてもらえました。敬虔な姿勢で生きる人が持つ柔らかな光や健やかな香りも、七十年という時に濾過されたエッセンスとして受け取ることができました。そして、そういったものをブログや冊子の形でたくさんの人と共有できるのだということも知ることができました。「八重子の日記」を読んでくださるみなさま、ほんとうにありがとうございます。

末筆となりましたが、八重子の日記を見いだし七十年近く前の暮らしをいきいきとよみがえらせてくださった宮内泰介先生、高崎優子さん、武中桂さん、庄司知恵子さん。先生方のお力で八重子の日記をより確かな形あるものとしていただきました。どうもありがとうございます。

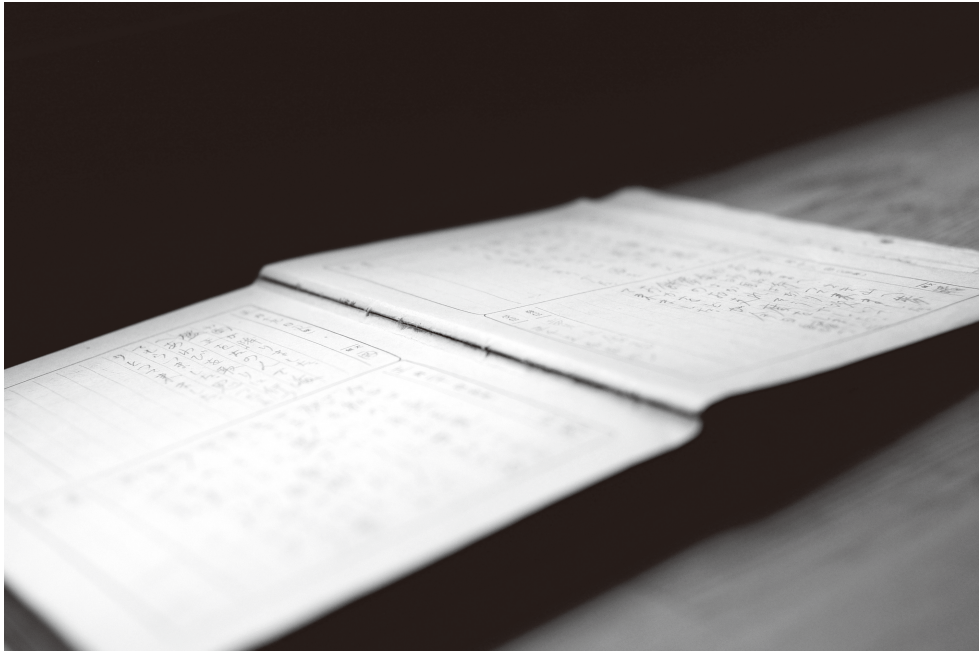
「八重子の日記」について

宮内泰介・高崎優子・武中桂・庄司知恵子

私たちの研究グループがこの「八重子の日記」の舞台である十三浜（石巻市北上町）のみなさんとおつきあいを始めたのは、二〇〇四年のことでした。北上町の東半分、海に面した地域を「十三浜」と呼び、八重子の集落、小指を含む十三の集落がそこにはあります。人びとの暮らしと自然との関係が私たちにはたいへん興味深く、さまざまな話を聞きに十三浜に通いました。二〇一一年の津波で十三浜が壊滅的な被害を受けたあとは、私たちも集団移転の合意形成にかかわるお手伝いなどをしながら研究を続けました。

そんな中、佐藤恵子さんがブログとしてネットに上げていた「八重子おばあちゃんの日記」に出会いました。私たちは驚きました。その静謐で美しい文章。目に浮かぶような昭和二〇年代の十三浜の生活。このような日記が震災を逃れ、そしてそのお孫さんによって私たちの前に現れたこと自体、奇跡に近いと思いました。このブログをぜひ冊子にして多くの人に読んでほしいと思い、私たちはそれに向けてのお手伝いをするようになりました。

日記には、今の私たちにはわからない言葉がたくさん出てきます。それらに注を付け、より深くこの日記を味わっていただきたいと私たちは考えました。いや、私たち自身がより深く理解したいと考えました。佐藤恵子さんが最初に注の素案を作り、それを土台にし



十三浜小指 八重子の日記

2017年2月1日 発行

著 者 佐々木八重子

編 者 佐藤恵子・宮内泰介・高崎優子・武中桂・庄司知恵子

装丁・デザイン 高崎優子

ながら、宮内・高崎・武中・庄司が注を作っていました。注づくりに際しては、佐々木家の佐々木正彦さん、佐々木文彦さん、岩並佐喜子さんにいろいろと教えていただきました。さらに、北上町の歴史に詳しい佐藤清吾さん、千葉巖夫さんからも多大なご教示をいただきました。さまざまな資料にも当たりながら、またそのつど佐藤恵子さん、佐々木文彦さんと連絡をとりながら、作業を進めていきました。

版づくりは製版ソフトInDesignにより高崎が行いました。日記の雰囲気壊さないような、しかし読みやすい版づくりにつとめました。

「八重子の日記」冊子化の作業は、私たちにとってたいへん楽しい作業でしたし、十三浜のみなさんの暮らしぶりについてより理解を深めることができました。かわらせていただいたことに深く感謝いたします。

〔脚注作成〕 佐藤恵子・宮内泰介（北海道大学）・高崎優子（北海道大学）・

武中桂（北海道大学）・庄司知恵子（岩手県立大学）

〔脚注作成協力〕 佐々木正彦・佐々木文彦・岩並佐喜子・佐藤清吾・千葉巖夫

〔地図作成〕 佐々木文彦・有限会社ササキ設計・高崎優子